NEPAL

2019spring!

FIWC

Kyushu

No03

Place Nepal Sindhupalchok Ghumang Maneswara 8

Date 2019.02.18 to 03.26

Member Okawa Yuya Airi Kasumi Maki Hinata Yudai K.Mai Yuka
Eriko Saki Ren Izumi Yuki Aiwa China N.Mai Yuriko

1. はじめに P.1

2. ＦＩＷＣについて P.2

3. ネパールについて P.3

4. 重要人物紹介 P.4

5. クラウドファンディング報告 P.6

6. ワーク P.7

7. プロジェクト P.17

8. イベント報告 P.23

9. 保健・ＳＰ報告 P.26

10. 会計報告 P.30

11. ネパールでの生活 P.32

12. その他の活動 P.34

13. 他己紹介 P.40

14. 感想 P.46

1.　はじめに

「ネパール」

日本でこの言葉を発すると、皆興味を持って話を聞いてくれる。

日本人で、ネパールの地を踏むことができるのはごく少数だろう。

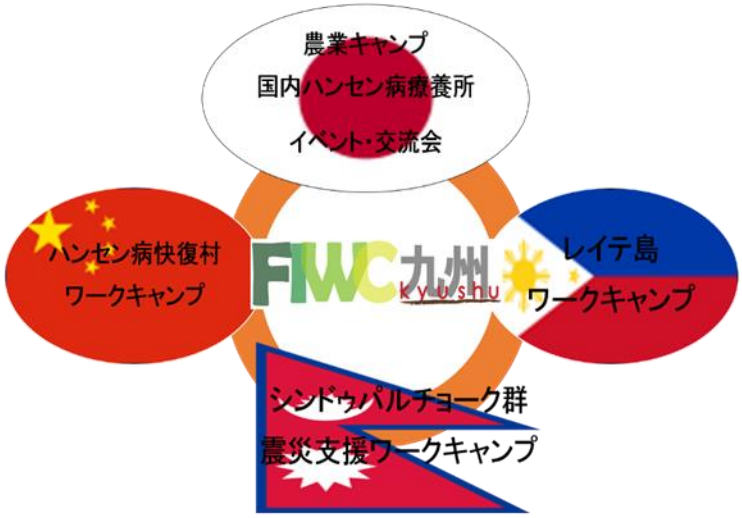
この 18 人のキャンパーはそのような経験をしてきた。
今回ネパールキャンパーが、ネパールに行くと決めた理由は、それぞれ違う。
ネパールの活動に求めているもの、目的もそれぞれ違うだろう。
しかし、「グンバを完成させる」「村の人たちとの仲を深める」
そういった目標は皆共通して持っていた。

目的や動機はなんであれ、ネパールの人たちのために何かをしたい、
ネパール人と交流してみたい、と共に思える人が、
周りに 18 人もいたことになる。
大学生活や、今までの人生でも、さまざまな選択肢がある中、こんなニッチな
目標を共有して、熱心に取り組んだことはなかなかないように思える。

村の人たちとの交流や、現地の宗教に触れる機会、
この 1 か月の経験を経て何を感じたか、何を得たかは人それぞれ違うだろう
もしかしたらまだ気づけていないことがたくさんあるのかもしれない。
実際、他のキャンパーと話していて、初めて知ったことや
気づいたことがたくさんあった。
このキャンプは、ネパールに行き、そこで得るものもたくさんあるが
一緒に活動する日本人から得るものも多くある。
様々な大学、学部学科の人が集まって何かを考える、となると
多くの学びがある。

改めて思い返して文字に起こしてみると、
人に恵まれ、機会に恵まれたのだと心から思えるものであった。

2.　FIWC について



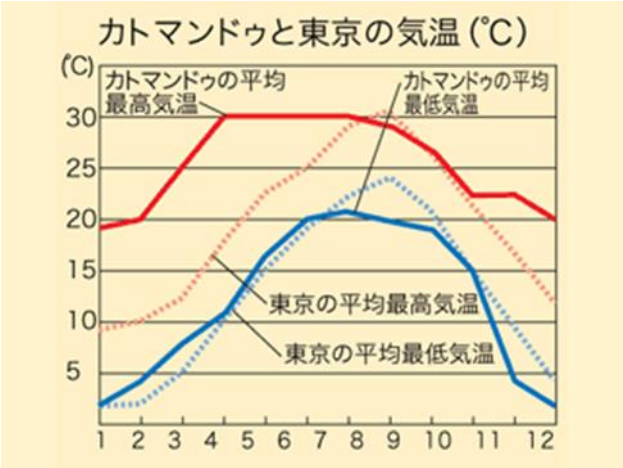
FIWC とは、フレンズ国際ワークキャンプ（Friends International Work Camp）の略称である。第二次世界大戦後復興のため、アメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）がワークキャンプを日本で実施した。そして、1950 年代に AFSC から独立し、FIWC が結成された。私たちの FIWC の「フレンズ」はその精神を受け継ごうと意思から採用された。それ以来 FIWC は、国内外でワークキャンプを 60 年以上実施している。現在その支部は全国に広がり、FIWC 関西委員会、関東委員会、東海委員会、九州委員会が活動している。

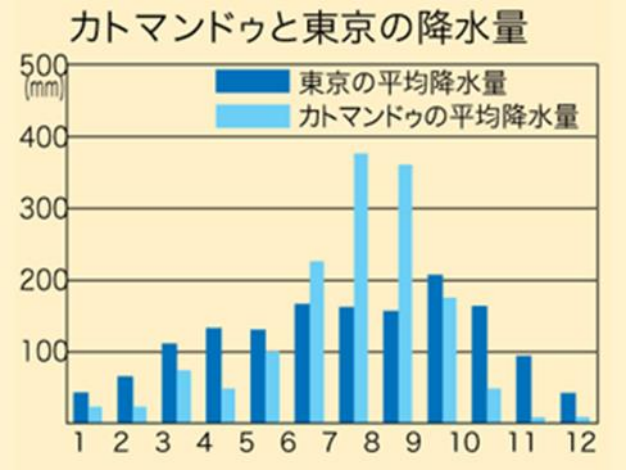
私たち九州委員会は九州（主に福岡）の大学生が主体となり、学生のみで運営・活動をしており、国外ではフィリピン、中国、ネパール、国内では耶馬渓の農業キャンプや国立ハンセン病療養所などを中心に活動してきている。私たち FIWC は、一般市民・学生による任意の非政府組織（NGO）であり、いかなる政治・宗教団体とも一切関係のない学生団体である。

3.　ネパールについて

人口　2930 万人
面積　14 万 7 千平方キロメートル
宗教　ヒンドゥー教徒(81%)　仏教徒(9%)
　　イスラム教徒(4%) など
首都　カトマンズ
産業　農林業
　　(出典：外務省データベース)

気候





出典:「地球の歩き方 ネパールの天気&服装ナビ」

ネパール大地震について
2015 年 4 月 25 日(現地時間)、ネパール中西部でマグニチュード 7.8 の地震が発生した。発生から 4 年が経った今でも復興は進んでいない状況であり、現在ようやく道路などの整備が始まっている。

4.　重要人物紹介

ママ(コモラ・ラーマン)

寝床の提供とご飯を毎日作ってくれたキャンパーのお母さん的存在であるママ。とても明るく、オープンでキャンパーととても仲が良い。今回は変な日本語(まじ卍、あざまる水産など)を使ってキャンパーと笑い合った。今回のキャンプでは前回よりも私たちに心を開いてくれていたように感じる。ママとお別れをする日の朝、皆のお皿を洗いながら涙を流していた姿は一生忘れない。

パパ(ポドム・ラーマン)

私たちのホームステイを受け入れてくれているすごく優しいパパ。今回のキャンプ中、パパは夜も出先で働いていたため、夜一緒にご飯を食べたり、たくさんお喋りをしたりすることができなかった。睡眠時間を削ってまで私たちのワークに協力してくれるその姿はキャンパーの心にも刺さった。朝、お仕事先から家に帰って来るパパをキャンパーが見つけると「パパ！！お帰り～！」と言って皆笑顔でお出迎えしていた。皆パパが大好きだ。

パネちゃん(スンダー・ラマ)

今回もキャンプの通訳とコーディネーターを務めてくれた。イケメン・優しい・運動神経抜群・筋肉ムキムキ・(ネパール語、日本語、英語の)3ヶ国語堪能などここには書ききれないほどの能力があり、多彩な人である。弱点といえば、こちょこちょに異常に弱いくらいである。とてもフレンドリーなので、コーディネーターというより、友達という感覚で親しんでいた。キャンパーはみんなパネちゃんを頼りにしていて大好きだ！

クリシュナー(クリシュナー・ドン)

１年以上前から私たちの活動を支え、協力してくれている村人の１人。ワークにも積極的だ。アーティスト活動をしており、よく自分の演出しているPVなどをキャンパーに見せていた。謎のこなれ感があり、キャンパーの女子のほとんどは彼の愛人か彼女か妻である。
しかし、村人にワークに協力してくれるように熱心に呼びかけたり、手伝ってくれたりするような熱くて優しい部分もある。

ミーラン(ミーラン・タマン)

１年以上前から私たちの活動を支え、協力してくれている村人の１人。すごく優しくて気さくに話しかけてくれる。ミーランと会ったことがある歴代のキャンパーの名前は全員覚えていて、楽しそうに思い出話をしてくれる。今回のキャンプでは日本語を少しずつ覚えて、日本語で喋りかけてくれることも！また、新たなことに挑戦し、努力しているミーランの姿が印象的だった。

スーレン（スーレン・ヨンジョン・タマン）

私たちにとって今回が初めましてのスーレン・ヨンジョン・タマンさん。この村のコミュニティハウスを管理している代表。一見、強面だが、サングラスを外したときに見える笑顔はじつは可愛い。ワークにもよく来てくれて、ネパリソングを流しながら踊っていた姿が印象的だ。初めましてだったが、積極的にキャンパーと関わろうとしてくれた。
バルビシの市長さんとグンバを繋げてくれたキーパーソンでもある。グンバの未来は明るい。

5.　クラウドファンディング報告

クラウドファンディング

今回はできる限り公民館を完成に近づけるために、クラウドファンディングを実施した。クラウドファンディングとは資金調達の１種であり、インターネットを通じてプロジェクトに共感した人から支援を受けるというものである。この度、株式会社 CAMPFIRE が運営するクラウドファンディングサイト「GoodMorning」にてプロジェクトを投稿し、約１ヶ月の期間かけ目標であった 343,000 円を 114%達成し、総額 392,000 円の支援を集めた。「GoodMorning」では、支援者にリターンという形で物品をお返しすることが決められており、本プロジェクトのリターンとしてキャンプ報告書やカトマンズで販売されている手芸品、村人からのメッセージ付きのポストカードなどを設定した。

プロジェクト詳細

プロジェクト名:「ネパール、大地震で倒壊した村で唯一の公共施設であるコミュニティハウスの再建！」

実施期間:2018 年 12 月 30 日~2019 年 1 月 29 日

目標金額:¥343,000

支援金額:¥392,000

(※14%の手数料を引いた¥337,120 をワーク費用に充てた。)

支援者数:58 人

URL: https://camp-fire.jp/projects/view/114224

ウェブページ画面

6.　ワーク

● 概要

場所：ネパール連邦民主共和国 シンデゥーバルチョーク郡 グマンマニスワラ

内容：公民館(グンバ)における壁三面・窓枠・ドア枠の設置、2 階へと繋がる階段の施行、公民館の周辺環境整備

期間：2019.2.20～2019.3.22

収容人数：最大約 50 人 カースト、年齢、民族問わず村人約 300 人全員が使用可能なものとする。

● 目的

3 年前に発生したネパールの大地震にて多くの家屋が倒壊した村に赴き、復興・発展に寄与することに。具体的には村の公民館(グンバ)の壁、階段の施行と周辺環境整備。公民館は主に冠婚葬祭や村人の話し合いの場として使用される。村の集団意識・自発性をより強め、村を活性化させるきっかけをつくる。

● 今後の展望

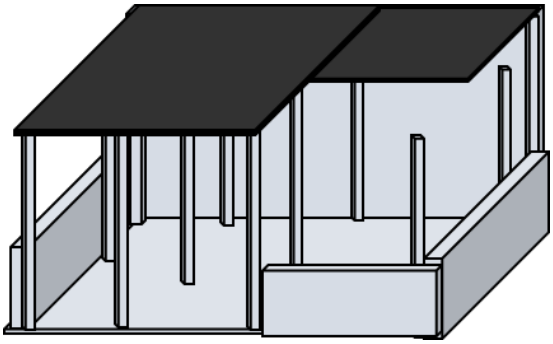
二階をつくるため、二階の壁・屋根・窓枠・ドア枠をつくることが今後、行われる作業の予定である。一階を村人の話し合いの場、二階をネパールの宗教に関する仏像などを置き、村人が信仰を深める場とする。

● 詳細

今年度のワーク内容は主に壁の取り壊し、壁建設、階段の建設、プラスター、周辺整備である。

昨年度のワークにおいて屋根の建設を行い、今年度も引き続きコミュニティハウスの建設を行った。

●昨年度までのコミュニティハウス



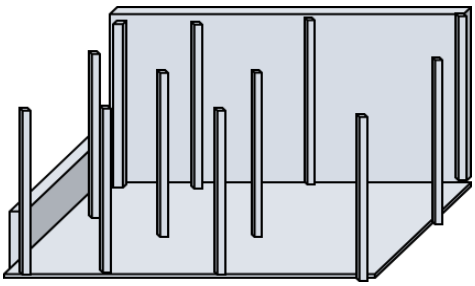
①壁の取り壊し

●　もともと存在していた作りかけの壁は、雨風による風化が激しく、そのまま壁の続きを作り続けるのは困難であったため、風化した壁を切り崩した。

1.　鑿（のみ）とハンマーを用いてコンクリート壁を切り崩した。

2．崩したレンガを再度使えるように付着しているコンクリートを落とした。

●壁を取り壊した図形



②壁の建設

1. 運ばれてきたレンガをかごで運搬した。

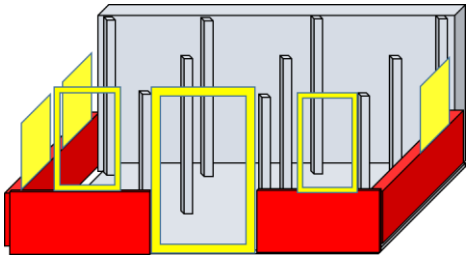
2. コンクリート、砂、砂利、水を適切な配分で混ぜた。

3. 下から順にコンクリートとレンガを積み上げた。（高いところにレンガを積む際は、木材で足場を組んだ。）

③窓枠、ドア枠の設置

壁を作る作業と並行して窓枠、ドア枠を設置した。窓枠を設置している様子。

●壁一部と窓枠の図形

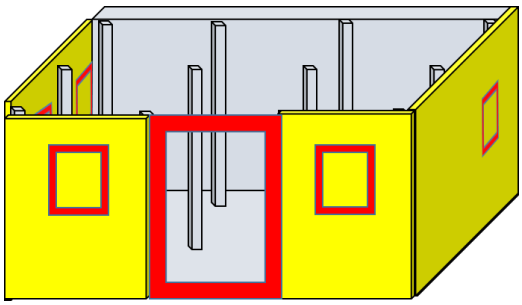


④階段の建設

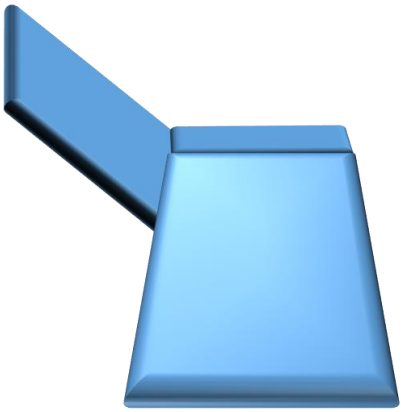
1. 木材と鉄筋で階段の型を作った。

2、型にモルタルを流し込んだ。

●壁全面と窓枠の状態図形



●階段の図形



●完成した階段

⑤プラスター

レンガとセメントで固めた全面の壁の内側と階段にプラスターを塗った。

⑥掃除

コミュニティハウス内に残っていたレンガ、材木、砂利、セメントの除去作業を行った。

⑦ビニールを剥ぐ作業

コーディネーターが壁のプラスター作業を行っている間に、昨年、天井を作った際に内側に残っていたビニールを剥ぐ作業を行った。

●各作業と並行して、コミュニティハウス周辺の整備作業を行った。

周辺整備

１，山なりになっている砂をスコップ、クワを使って削っていく。

平成 30 年度　ネパール本キャンプ　ワーク会計報告

（収入の部）

項目	金額（NRs）
クラウドファンディング	286,140
キャンパー拠出金	270,000
	556,140

※ 1000Rs≒1000 円

（収支の部）

項目			決算額	合計(NRs)
資材費	セメント	60袋	54,000	
	鉄筋	3m×3本	31,500	
	鉄のバンド	20m	1,200	
	釘	10個	200	
	釘	１5個	400	
	釘（追加分）	10個	100	
	窓の資材	３6個	792	
	竹のバスケット	2個	800	
	ホース	6m×2本	800	
	砂	トラック3台	32,205	
	砂利	トラック1台	3,000	
	レンガ	7000個	98,000	
	ドア枠	1個		
	窓枠	5個	72,000	72,000
	杭		250	
	鉄網	2m	300	
				295,547
人件費	スーパーワーカー	Rs1500×29回	43,500	
	スキルワーカー	Rs1000×24回	24,000	
	謝礼費		1,000	68,500
	コーディネート費	Rs3000×35日	105,000	
				173,500
運送費	セメント等		4,310	
	砂利		7,000	
	レンガ		26,000	
	窓、ドア		11,000	
				48,310
税金	砂利		1,665	
	レンガ		260	
				519,282

●反省

ワークを行っていく中で様々な問題が発生したが、どれも事前に対処が行えたり、改善できることであった。今回学んだことを次回以降に活かして、今後より良いワークキャンプになることを期待する。

〇技術的に私たちに出来るワークが少なかった。

原因

- キャンパーには建築に関する知識や技術が全く無かったため、中途半端にコミュニティハウスの建設に携わると正確性が失われてしまうと判断して主なワークは専門的な知識を持ったミステリやスキルワーカーに任せっきりになった。

⇒技術的、専門的なことを私たちが行うのは難しいが、事前に知識を得たりワークの工程を理解しておくなど、スムーズにワークが行えるようにしておくことが大切。ワークを進めていく中でスケジュールは大きく変更するため、その都度コーディネーターとの打ち合わせを怠ってはいけない。

〇予定より大幅に早くワークが進んだ。

原因

- 2018 年度の反省を生かし、工期の面で遅れないようなスケジュールを立てたが、大幅にワークのペースが早くなるという予想外のことが起きた時に上手く対応出来なかった。キャンパー内で話し合ってコミュニティハウス周辺の環境整備を行ったが、都合上満足のいくように出来なかった。

⇒工期が遅れなかったのは評価すべきである。しかし、早くワークが終了したため、別ワークに取り組んだが、思うように進まなかった。それならばワークを切り上げ、以降ほかにどんな活動を行うのかを現地でＭＴＧをして明確化するべきであった。例えば、プロジェクト調査への完全移行、visit を行うなど、明確化された共通認識を持つべきだった。

〇道具(スコップ、ハンマー、台車、軍手など)の不足、破損、紛失。

人数とワーク内容に対して道具の数が不足していた。また、私物だけでなく村人から借りた道具を破損、紛失させてしまうことがあった。破損に関しては正しく使用していたため仕方ないが、紛失は避けるべきだった。

原因

- 道具はミステリやスキルワーカー、手伝ってくれる村人と共有していたため、取り合いになった。道具を使いたい時に使えない場面が多々あり、手持ち無沙汰になってしまった。

⇒必要に応じて道具の数を増やす。そしてミステリ、スキルワーカーと私たちが使う物は分けたほうが効率が良い。

- 紛失に関しては、管理を徹底していなかった。村人個人に借りた道具を私たちが把握、管理できていなかったり、逆に私たちが村人に道具を貸してそのまま紛失することがあった。

→しっかりと管理を徹底すべき。特に借りたものは誰に借りたのか、ちゃんと返したかといったことを全員で共有して管理する。ワーク班内で紛失物の係を設置しておくべきであった。

●総括

今ワークでは、前年度と同様にコミュニティハウス（グンバ）の建設を引き続き行った。私が今回村を訪れて感じたことは、まだ未完成ではあるがコミュニティハウスプロジェクトに見切りをつけるべきなのではないかということだ。理由としては、２つある。１つは現在ようやく村にも政府からの支援が行き届いており、我々が手を出さずとも彼らが自らで支援を行えるからだ。それならば私達がワークをする必要がないし、違った形で村の支援が出来るのではないかと思う。今回もコミュニティハウスプロジェクトを行ったことにより、「わざわざ日本人の学生がネパールの村に来て復興支援を行った。」という事が村人たちのコミュニティハウスに対しての意識が改変され、今回プラスター作業が途中で中断したが国からの補助金によって彼ら自身で作業の続きを行ってくれるという約束を得た。

そのためこれを機にコミュニティハウスプロジェクトを村人主導で行ってほしいと考えた。

２つめはネパールでのワークキャンプの限界である。これはワーク規模が大きければ大きいほどそうであると思うが、私たち日本人ができる作業というものは限られており専門的な作業が必要になる場合は尚更できることも限られてくる。今回のワークは特にそのような状況が見受けられ、ワークをワークキャンプの概念で進めることができなかった気がする。以上のことから見切りをつけるべきなのではないかと感じた。

もちろん今後も同じ村に行くことによって彼らの村に貢献するという意識が出るのであれば行く価値はあると思うし、私のワークキャンプの理想である、私たちが村の発展のための「起爆剤」になっていてうれしい。

今後このキャンプが続くかどうかもわからないしコミュニティハウスがどのような使われ方をされているのか現時点では全く分からない。だが私たちがグマンマニサワラ村に行ったことによって、私たちが行ったワークをモデルにして村人自身で主体的に問題に取り組もうとしているし、市の市長と面会する機会を得てコミュニティハウスプロジェクトに支援してくれることにもなった。私たちが村に行ったことでこんなにも変化があったのだ。一時はワークを村人と出来なくてワークキャンプとは何だろうと思った時もあったが結果的に私たちが村に行くことで村が変わり続けている。この流れを途切れさせてしまったら元に戻すのには時間がかかると思う。そこで私が言いたいのは、行こうか迷っているなら是非行こう。何も行動を起こさないのはもったいない。

西南学院大学３年　洲崎裕也

7.　プロジェクト

1.　プロジェクトを開始した経緯

FIWC 九州ネパールキャンプが、グマンマニサワラ村でのコミュニティハウスの建設に関わり始めたのは昨年の春のキャンプである。地震で倒壊したコミュニティハウスの再建のため、当初村の人々は自分たちの生活費からお金を出し合い、基礎と柱、壁 1 枚を建設した。しかし、集めた資金も尽き、コミュニティハウスの建設は中断された状態だった。そのような状況で、私たち FIWC 九州のネパールキャンプでコミュニティハウスを一緒に建設することになった。ネパールキャンプでは、助成金やクラウドファンディングを用いてコミュニティハウス建設のワーク資金を集めたが、建設に必要な費用を集めるのは容易ではない。また、村の人々が望んだコミュニティハウス再建であるため、村の人々自身にもコミュニティハウスの建設を一緒にやってもらうだけではなく、資金の調達も共に行なっていきたいと考えるようになった。JICA のネパールオフィスを訪問した際も、震災後、インフラをはじめとしたハード面の支援が中心で行われているが、今後、生計を立てるためのノウハウを身につけるといったソフト面の支援も必要になるという話を聞いた。ネパールでキャンプを続ける中で、私たち FIWC 九州でもソフト面の支援ができるのか模索する時期なのではないかと考え、ワークに付随する形でプロジェクトと称し取り組むことにした。

2.　国内 MTG でのプロジェクトの活動

ワークに付随する形でプロジェクトを行うため、コミュニティハウス建設や建設完了後の管理運営のための組織化を進めることになった。そのため、私たちが行いたいと考えているコミュニティの組織化について、ネパールのコミュニティハウスの現状と比較しながらみんなで学習した。組織化したい理由を明確にするために、一人ずつ理由を考え共有した。話し合いの中で、私たちがいなくなった後も村人たちはコミュニティハウスを自ら運営するのかという疑問が出てきた。コミュニティハウスをこれからどう管理していくか、コミュニティハウスをどう使いたいのか決めるためには、村人同士の話し合いが必要であるため、村人同士の話し合いの場をミーティングとして設けることをプロジェクトで行うことにした。また、コミュニティハウスの管理については、村人の家を訪問する中でコミュニティハウスの話をして管理等に関心があるか調査することとした。

3.　夜のミーティング

　当初、イベント時に行う予定であったミーティングは、村の家の建設作業の都合で、開催ができなかった。そこで、夜にコミュニティハウスの前で行った。

参加者：キャンパー、村人（約 10 人）、コーディネーター

目的

・村人同士でコミュニティハウスについて話すことで、コミュニティハウスに対する想いを高めてもらう。

・組織化円滑に進めるためそれぞれの村人の立ち位置を知る。

・年代や身分差関係なく、村人みんなの意見を聞くため。

GAM での質問

Q. 誰がコミュニティハウスを管理していくのか。

A. スーレンが前リーダーより引き継いだ。コミュニティハウスはまだ完成しておらず、これからまだ仕事が残っており日本人の助けが必要。村人も手伝いたいが、家の仕事があり忙しい。コミュニティハウスは村で管理し、代表は後日みんなで決める。

Q. 今後 FI がコミュニティハウスに関わっていくか定かではないため、組織作りを早める方がいいと思うがどう思うか。

A. これから行政から補助金としてもらう 80 万と、村の人々で集めるお金でこれから残りの建設を進めていく。コミュニティハウス建設を頑張る日本人を見て勉強になったから、村人だけで仕事をしていけるよう努める。

Q. 昔のコミュニティハウスでは冠婚葬祭が行われていたのか。コミュニティハウスがない状況で冠婚葬祭を行ってきている状況が続いているが、コミュニティハウスが完成したら実際に使うのか。

A. 10～15 年前にコミュニティハウスがあったときは宗教的なお祭りでは遠い村の人もコミュニティハウスに集まっていた。以前は村の僧侶がコミュニティハウスでお葬式をしていたが、コミュニティハウスがない現在、村に僧侶がおらず、冠婚葬祭の時は遠い所から僧侶に来てもらっており、雨季は特に来てもらうのも厳しい状況である。コミュニティハウスができたらその心配はなくなる。

総括

当初は幅広い年齢層の村人に集まってもらいイベントの後に話し合いを行う予定だったが、人が集まらなかった。そのため、その日の夜に話し合いを行うことになり、村の一部の 10 人程しか集まらなかった。また質問に答える人が権力者であるスーレンなどに固定化されてしまい、みんなの意見を聞くことが出来なかった。この現状を踏まえ、村を出るまで５日間しかない中でミーティングをした結果、次の下見キャンプに残すための村のインタビュー調査と自分たちのグンバや組織運営に対する想いを伝えることになった。

４． インタビュー調査

調査において、各家庭を回って質問を行った。今回調査を行った民族は、タマン(8 軒)、ポーレル（３軒）、ラウト（２軒）、スレスタ(1 軒)、ネパール(1 軒)という５つの民族である。タマン民族は仏教徒でそれ以外の４つの民族はヒンドゥー教に分類される。この村の多くの人はタマン民族である。質問内容は、コミュニティハウスとコミュニティハウスの管理運営に対する村の人たちの意識調査と、雨季に行う下見キャンプでは行うことができない乾季のニーズ調査を行った。

質問項目

１．これからコミュニティハウスを何に使っていきたいか。

２．コミュニティハウスを建てることや Management Community（村の公共物の管理の組織のこと）に参加したいと思うか。

３．生活で困ったことがあったら誰に話すか。

４．みんなにとって必要な水道などの新しいプロジェクトなどを行うとき、自分の意見をみんなに知ってほしいか。

５．グンバがないこと以外で、今困っていることはあるか。

インタビュー調査結果のまとめ

基本的にグンバは仏教徒であるタマン民族が冠婚葬祭として使う。よってタマン以外はヒンドゥー教でグンバは宗教的には使えない。ヒンドゥー教の人はヒンドゥー教のお寺で冠婚葬祭を行う。しかし冠婚葬祭やミーティングは自分たちからは使おうとしないが参加はできる。また、ヒンドゥー教の人の冠婚葬祭はグンバとは別にヒンドゥー教用のお寺がありそこで行われることが分かった。

民族関係なくみんながマネジメントに関わりたい、自分の意見を言いたいという意志を持っていたが学歴が高い人の方がこのような場面で優位になりやすいため村の人全員の意見が反映されにくい。これについては、私たち日本人が踏み込むと村人同士や私たちと村人の関係性を悪くしてしまう可能性があったので私たちの活動をよく理解してくれている

一部の村の人に村の人の学歴や身分の差関係なく一人一人の意見を反映していってほしいと提案する形で伝えた。

今回調査を行ったグマンマニサワラ村の現在の乾季の需要は水であった。もっと共同の水場が欲しいという意見や各家庭に水道が欲しいというものが多かった。

私たちが伝えたい想い

自分たちのグンバや組織運営に対する想いを、紙に書いたネパール語の文章と私たちが日本語で一文ずつ話した後コーディネーターにネパール語に訳してもらった動画を見せた。

〈伝えた文章〉

私たちは見ず知らずの自分たちを温かく迎えてくれたこの村の人々が大好きです。私たちは今グンバを建設しています。グンバは結婚式やお葬式に使われていると思います。私たちは地域に関係なく皆さんにグンバを使ってほしいと願っています。

日本でグンバを建てるための資金集めをした際、お金を出してくれた人も、私たちと同じ思いです。このお金は個人のためではなく、皆さんが使うグンバのために集められたお金です。この前、ミーティングをしましたが、少しの人しか来てくれませんでした。だからこそ、今後はグンバが皆さんの集まる場所、情報共有の場所になってほしいです。私たちは村の人たちでもっと話し合ってほしいです。例えば道路作りなどといった大きな問題から、地域に関連する小さな問題まで、村で考えなければならないことは自発的に話し合う機会を作って解決してほしいです。

そしてマネジメントコミュニティを決定するときにも、多くの村人の意見を取り入れてほしいです。このような話をする機会がグンバをきっかけに増え、村の人々が団結し、村が活性化することを願っています。

5.　他の村のグンバ 視察調査

活動している村とは異なる村のコミュニティハウスを訪れ、グンバを管理している管理者の女性と近くに住む村人 3 名に対してインタビュー調査を行った。

経緯・目的

コミュニティハウスは私たちにとってあまりなじみのないものであるため、コミュニティハウスそのものについて、またコミュニティハウスの管理について知りたいと思ったため。

インタビュー調査結果のまとめ

コミュニティハウスは、仏教徒のお祈りや地震時の避難場所として用いられている。遠方から来訪者が来た場合の宿泊場所として提供することもある。冠婚葬祭はグンバの大きさの問題上行っていない。コミュニティハウスは仏教徒のためのお寺であるが、ミーティングの時はヒンドゥー教徒も利用する。コミュニティハウスでのミーティングでは、コミュニティハウスのことについて話す。過去には地震でコミュニティハウスが壊れた時にどうやって建て直すかを話した。宗教的な場であるため、コミュニティハウスのこと以外については話し合いを行わない。

コミュニティハウスの管理は、総勢 11~13 人の Management Community のメンバーが行っているが、地震が起きてからほとんどの村人が都市部に移住したため現在はインタビューを受けてくれた女性 1 人が行なっている。Management Community のメンバーは村人の投票によって決められた。Management Community の年齢層は幅広く、若い人は 30 歳程度である。ネパールの法律により組織のリーダーが男性ならサブリーダーは女性が務めることになっているため女性も組織に入っている。電気代等の管理のための費用は、お祈りの際に使用するろうそくをコミュニティハウスで売っており、その売り上げを利用したり、一階と二階に設置されている募金箱に寄付されたお金を利用したりしている。村人から徴収することはない。また、政府から補助金などは受け取っていない。コミュニティハウスを作ったときの資金は、村人たちがお金を出し合ったり、近くを通った車に募金をお願いしたりして徴収した。政府からの補助金は一切なかった。

6.　プロジェクトのまとめ

今回は、予想していなかった活動内容の変更があり、うまくいかないことも多かったが、臨機応変に対応して率先して行動したことで、みんなが工夫して考え、村の人たちに下見で聞けなかったことも聞くことができた。今回集めた情報は、今後のネパールでの活動につないでいきたい。また、他の村のコミュニティハウスを見て、普段からコミュニティハウスを身近に使っている村の人たちの話を聞くと、私たちが想像していた以上にグンバの存在が大きな意味を持っているということに気付いた。グマンマニサワラ村の村の人たちが望んでいるコミュニティハウスの完成形がはっきりと見えていなかった私たちにとって、村人のコミュニティハウスに対する想いや考え方、視点に少しでも近づけられるとても良い機会だった。村は違うが、グンバの存在意味を知ることができた。

一方で、集まって話した時も集まる人や意見を述べる人は限られており、村の中でも立場が上の人のみが話しているような状況だった。その中で、民族や身分を超えて集まりグンバを使ってほしいという私たちの想いを村の人たちに伝えることやグンバの運営を行う組織づくりについて村の人たちに話した時、相手や通訳をしてくれていたコーディネーターの表情や話から、私たちが理解できていない現状があり、時間をかけて慎重に行うべきことであると実感した。既存の組織がある中に、私たち日本の学生が組織に踏み込むことはできないと感じた。

8.　イベント報告

第一回

3 月 9 日 運動会

場所 ビックツリー 通訳パネちゃん

参加者 キャンパー全員、子供たち 20～30 人

＜準備＞

前日準備：ビラ配り、ビジットによる呼びかけ。

当日準備：飾りつけをイベント開始予定時間の 30 分前から行った。

＜内容＞

① じゃんけん列車

じゃんけんの勝敗で、負けたら後ろに着くと言う単純なルールのゲームを選んだ。

最初は、恥ずかしがって参加していない子供もキャンパーよびかけによって参加してくれた。

１位にはご褒美の飴とメダルをプレゼントした。

② だるまさんがころんだ

パネちゃんの通訳のもとルールを説明し、何回か試しの後、楽しく本番。

最初はキャンパーがダルマ役をして掛け声は子供たちが馴染みぶかいように「ダルバートカニ」、終盤は子供たちがダルマ役。

最初にタッチした人には飴をプレゼントした。

③ ハンカチ落とし

村の子供たちはみんなルールを知っていたのでとても進めやすかった。

三回気づかれずに背中を叩いた人には飴とメダルをプレゼントした。

順番は人数に応じて決定した。

＜反省点＞

景品として折り紙を使ったが、破られて捨てられるなどゴミとなってしまった。風船についてもわざと割る子供が多数だった。

チラシを一部紛失してしまったため、チラシを指定の場所に置いておき、ビジットの前に複数枚持っていくように声をかけることが必要。

＜良かった点＞
偶然、結婚式との日にちとかぶり参加者を多く集めることができた。
キャンパーたちが各々、子供たちをゲームに参加させるよう工夫を凝らした。

＜総括＞
チラシを半分しか配れなかったことで､実際に来ることのできた人数の半分しか呼ぶことができなかったかもしれない。しかし、子供たちにゲーム上、不満を持たせないようなキャンパーたちの配慮も見られ、来てくれた子供たちは楽しんで帰ってくれた。

第二回
3 月 16 日 日本食パーティ
場所 ビックツリー 通訳パネちゃん
参加者 キャンパー全員、子供たち 50 人＋大人 10 人程度
後発が到着してから初めてのイベントで前回より規模の大きなイベントとなった。

＜準備＞
前日準備：チラシを用いて村を回る際にキャンパー全員で広報を行なった。
当日準備：朝から飾り付け班と調理班に分かれ準備を行なった。

＜内容＞
日本から持参したカレールウと現地で購入した野菜、米を使用して日本のカレーを振る舞った。カレーは現地の食事よりはマイルドではあったがスパイスが効いているからか、好評で「ミトチャ！(おいしい)」という声が飛び交っていた。おかわりをしたいという子供もおり、カレーは嗜好にあっていたのかもしれない。

＜反省＞
・日本食の準備に時間がかかり本来のイベント開始時間に間に合わなかった。日本食をも

っと準備が簡単なものにするか開始時間を 11 時にしていたがもう少し遅めに設定するべきだった。
・もともと日本食を振る舞った後、折り紙教室を行う予定だったが、第一回のイベントの反省を踏まえ折り紙教室を行わないことに決まった。しかしそれによりプログラムが日本食パーティだけになってしまい、日本食の準備で時間がかかった際時間をつなぐ代替プログラムがなかった。イベントをするにあたってはプログラムを 2 つ以上は用意するべきだった。
・なかなか連絡がうまく取れておらずキャンパー内でも混乱が起こってしまった。もっとキャンパー全員、イベント係内でも意思疎通を図るべきだった。
・想像以上に人が集まりカレーを配る時、途中で食器が足りなくなってしまい、食器を洗う時間の間に、誰がカレーを食べてないのかわからなくなってしまった。
・イベント中、通訳のパネちゃんの手が離せない状況になり指示が通らない状況が多々あった。「集まって下さい」や「終了です」といったネパール語を事前に覚えておくべきだった。

＜総括＞
日本食パーティには予想の二倍以上の人数が集まり、私たちが今回活動している村以外の人たちも来てくれたが、それにより様々な問題が起こった。日本食などといった、食事をふるまうイベントはどのような人に来てほしいかターゲットを定め、集まる人の人数を絞っていくべきだ。子供たちは喜んでカレーを食べてくれて楽しそうにしており、日本人との親睦をより深めることができた。
飾り付けをすることで雰囲気が明るくなりイベントの場所も一目でわかってよかった。広報についてもチラシとネパール語の台本を使用したことでうまく広報でき人が集まったのは良かった。これらの反省を踏まえて次回以降ベントはより良いイベントを作り上げて欲しい。

9.　保健・SP 報告

仕事内容

【日本にいる間】
・海外保険の書類、保険カードの管理　※１
・破傷風、A 型肝炎、日本脳炎の予防接種の確認　※２
・アレルギーや持病の把握
・保健バックの中身の確認、補充。
※１海外保険は FIWC 九州の安全対策のルールとして、参加者全員が治療費用 3000 万円以上、救援者費用、その他傷害、過失、疾患等にも保障のある保険に加入すること。
※２これら３つの予防接種は FIWC 九州のルールとして、接種することが特に推奨されている。

【ネパールにいる間】
・毎日キャンパーの健康チェック。
・怪我の手当て、病気の予防。
・保健バック、保健カードの管理。

日本から持参したもの

・スポーツドリンクの粉末：発熱時、体調不良の際に使用した。
・経口補水液 OS1：解熱、体調不良の際に使用した。
・防水フィルム（傷口用）：傷口を水や、菌から守る際に使用した。
・ガーゼ：傷の手当の際に使用した。
・オロナイン軟膏：使用しなかった。
・手当用の包帯、テープ：あまり使用しなかった。１つで十分。
・バンドエイド：切り傷、擦り傷等に使用した。余分に多く持って行っていた方が良い。
・サロンパス：体の凝り、痛みに使用した。小分けになっているものが使い易い。
・スキンガードミスト：虫除けの際に。サラテクトを主に使用したので使わなかった。
・サラテクトミストリッチ３０：夏季は使用頻度が少ないため４本も必要なかった。
・ムヒ：虫刺されなどのかゆみに使用した。
・マッキンゼット　殺菌消毒薬：怪我した時の消毒に使用した。

【薬】
・ザガードコーワ整腸剤：お腹の調子が悪い時によく使用した。
・第一三共胃腸薬：胃のもたれ、不快感に。一度だけ使用した。
・バファリンA解熱鎮痛剤:発熱時や体の痛みに。使用しなかった。
・正露丸：下痢、食あたりに。使用しなかった。
・総合感冒薬：喉の痛み、発熱、鼻水などの症状があった際によく使用した。
・酔い止め：必要な人は個人で持ってきていたため使用しなかった。
・便秘薬：長く便秘気味だった時に使用した。
・イブクイックA：風邪の初期症状、鎮痛剤として使用した。
・バンテリン筋肉痛滋養強壮剤：筋肉痛に。使用しなかった。
・ヘパリーゼ：胃腸障害の栄養補給。一度だけ使用した。
・鉄分、ビタミンのサプリ：使用した。

【備品】
・マスク：個人で持ってきていたため保健バックにあるものは使用しなかった。
・体温計：使用した。
・ピンセット：棘を抜く際に使用した。
・爪切り：１つ持参。使用した。
・ハンドジェル：ウエットティッシュがない時に使用した。
・エマージェンシーシート：使用しなかった。
・クレベリン：置き型タイプとスプレーを持参。一ヶ月で１つ使い切った。
・冷えピタ：10枚も使用しなかった。

【今後必要ではないと思われるもの】
・エマージェンシーシート
・ヘパリーゼ

【今後必要であると思われるもの】
・胃薬などで、食後でなくても飲めるものを持参しておく。

【個人で持参したもの】
・ビオフェルミン
・マスク
・冷えピタ

病院

【ネパール（バルビシ：村に最も近い町）】

・病院名：Bahrabise helth post

38 度以上の高熱が出たキャンパーがいた際に利用。

政府の病院だったため診察費はかからず、薬代のみ支払った。

【中国】

・病院名：昆明市第一人民医院甘美医院

・電話番号：+86-871-6318-8200

カトマンズから昆明でのトランジットの際、急性胃腸炎になったキャンパーが利用。

加入していた保険会社の提携病院であったため、治療費の支払いはなかった。

反省

【よかった点】

- キャンパー一人一人が少しでも体調が悪くなったらきちんと伝えてくれたので、大きな病気につながることはなかった。
- 個人で薬やマスクを持ってきていたため不足するということがなかった。
- 体調不良者がいた際、周りの人が率先して手当、看護をしてくれた。
- 毎日健康チェックをし、キャンパーの健康状態を把握することができた。
- 保健バック内の使用したもの、薬を記録できていた。
- 一人一個ウエットティッシュを持ってきていたため、外出先でも必ず誰かは持っていた。

【改善点】

・村にいると、「チャン」と言う飲み物を村人から勧められる。この「チャン」は数種の穀物を発酵させて作ったものである。この飲み物は村人が作ったものでも安全ではないが、買ってきたものである方がさらに危険である。「チャン」を販売する人が、あらゆる薬品を混ぜている可能性があり、ネパール人でさえもお腹を壊すほどである。そして今回それを飲んだキャンパーが体調を崩した。

→今後「チャン」などの、現地の生水のままの飲み物を飲まないように、一人一人が常に意識しておく必要がある。

・余分に多めに入れていたが使わないものが多かった。

→過去 2 年の報告書を参考にして、今後も使用しなさそうなものは持っていかずなるべく保険バッグの中身を少なくしてもいいのではないか。

・ホームステイ先から借りた毛布を使っていた人たちに湿疹が出た。

→２、３日に一回は天日干しするなど今後対策を考えておく必要がある。

・次亜塩素酸を持参していなかったため、嘔吐発生時に処理がきちんと出来ていなかった。

→安全対策の手引きにもあるようにマニュアルを参考にしながら処理しなければならない。

・全員の保険の証書を管理していなかった。

→全員分のコピーを必ず保険係が管理しておき、書面で持つようにする。

・入った保険会社についての知識が少なかった。

→事前に保険内容を調べておき緊急時に対応できるようにしておく。

10.　会計報告

換金

２月 13 日(水)　￥38,073 円　→2100 元※１
2 月 19 日（火）￥32,000 円　→31,913Rs
3 月　3 日（日）￥41,000 円　→ 40,877Rs
3 月 11 日（月）￥30,000 円 →　30,000Rs
現地通貨はルピー（rupee,Rs）
※1:元は中国のトランジット中に使用。

支出

項目		金額（NRs）
宿泊費	カトマンズホテル費	14,935Rs
	村での滞在費	50,000Rs
食費（飲み物代も含む）		97,865Rs
移動費		75,750Rs
通信費　※1		9,900Rs
医療費 ※2※3		880Rs
イベント費※4		3000 円

※1:通信費は現地で購入した SIM カードおよびリチャージカード代、また、携帯電話についてはキャンパーが私的に持っていたスマートフォンを使用した。
※2:バルビシの病院は政府の病院で治療費がかからなかった。
※3:薬代
※4:日本で食料以外の材料を購入した。

収入

生活費：450,000 円（キャンパー１人につき 25,000 円）

総括

反省点

- パネちゃんに前払いしてもらっていた。
- 会計ミーティングの回数が少なく記録が不十分だった。
- 支出のおおよその目安はつけていていたが、移動費は予想を超えることになった。

改善点

- 会計ミーティングは、支出があった日、できなかった場合は次の日に朝に必ず行いきちんと記録する。
- 移動費についてはバルビシに行く回数を正確に決め、会計係だけではなくキャンパー全体に共有をする。

良かった点

- お金を会計係とリーダーで分けて持っていたため大金を持ち歩くことがなかった。
- 支出の予想をしてお金を振り分けていたため、おおよその支出を把握できていた。
- 領収書をきちんともらい支出の計算が後からもできた。

参加するにあったてかかる費用について

ここでは、キャンプに参加するにあたって１個人がかかった費用の例を示す。

項目	金額（円）
キャンプ参加費※1	2,000 円
航空券代※2	70,810 円（先先発） 59760 円（先発） 57,780 円（後発）
生活費	25,000 円
土産代	5,000 円
合計	10,2810 円（先先発） 91,760 円（先発） 89,780 円（後発）

※1：FIWC 九州の規約に則り、キャンプに参加する度に￥2,000 を納める。

※2：往復分の手段。ルートは、福岡→昆明→上海→カトマンズ

11.　ネパールでの生活

<u>LP(Life Police)の仕事</u>

・朝からキャンパーを起こす

・布団を干す

・部屋の片付け

・その他の周辺の生活環境整備

①衣

・乾期で朝晩は肌寒いのが少し心地よい

・昼間はカラッとしていて日本の夏程度

②食

・ママが１日２回作ってくれるダルバート・タルカリ。毎日食べても飽きないくらいおいしかった。

・たまにコーディネーターのパネちゃんがパスタを振る舞ってくれた。

③住

・キャンパーが１ヶ月暮らした場所。寝泊まりのグループを 2 つに分けて寝泊まり。
毎晩、自分たちで寝袋を広げて川の字になって仲良く就寝。

・お風呂はない。選択する水場で、服を着たまま水を浴び、日本から持参したシャンプーやボディソープで体を洗う。気温の高いうちに入らなければ死にそうになるくらい寒い。
・トイレは穴を掘って、和式のトイレをつけただけの簡易的なトイレ。夜は懐中電灯なしでは何も見えないくらい暗い。

④1 日の流れ

7:00　起床
7:30　ビスケット＆チャイでゆっくり過ごす
8:00　ワーク orVISIT
10:00　朝食
11:00　再びワーク orVISIT

18:30　MTG
19:00　夕食
20:00　自由時間
23:00　就寝

12.　その他の活動

～ネパールの結婚式～

【3 月 9 日結婚式（タマン式）】

結婚式前日の夜は前夜祭として、村人らは結婚式の会場の広場でご飯を食べていた。ご飯の後は、村人も私たちも一緒に踊った。老若男女問わず、皆が楽しそうに踊っていた。その日は朝方まで音楽が鳴り止まなかった。結婚式当日は、お祝儀を渡した人が、新郎新婦の額に「ティカ」と呼ばれるお米をつけていくので、新郎新婦の額はお米だらけになっていた。日本の結婚式とは様々な面で異なっており、私たちにとっては驚くことばかりだった。結婚式当日は、新郎新婦や、その親戚の人たちがお酒を飲んだり歌ったりして楽しんでいた。

【3 月 13 日結婚式（チェットリー式）】

ビジットをしている時にその日に村で結婚式があることを知り参加した。まずご飯を食べる会場に行き、民族料理のダルバート・タルカリや、ふわふわしたお煎餅のようなものが大量に乗ったご飯をいただいた。日本の味に近い料理もあり、おいしかった。

結婚式の会場では、女性は主に赤い民族衣装を着ており、若い男性は主にスーツ、高齢の男性は主に民族衣装を着ていた。太鼓と笛の演奏がなされており、タマンの結婚式に比べて華やかな印象を受けた。チェットリー民族の結婚式は、指輪交換、誓いの言葉などがあり、西洋式の結婚式に少し近いものを感じた。ここではお祝儀を渡した人が右下の写真にあるような赤い色がついたポップコーンのようなものを新郎新婦に渡していた。

~Holi(ホーリー)~

ホーリーとは？

ホーリー祭（Holi）とは、インドやネパールのヒンドゥー教の春祭り。春の訪れを祝い、誰彼無く色粉を塗り合ったり色水を掛け合ったりして祝う。

ホーリーin グマンマニサワラ！

村でのホーリー祭の日の朝、前日に、色水をいきなりかけられることを伝えられていたこともあり警戒しながら外に出たが、特に何も起こらなかった。ほっとしていたところに、現地の人から「ハッピーホーリー！」と言って色水をかけられ、ホーリー祭は始まった。

いつもワークを手伝ってくれていたミーランやクリシュナはまるで子供みたいに水や、色とりどりの粉をかけてきたので、私たちも負けじと、色水を掛け合った。普段ワークに関わってくれているエンジニアやスキルワーカーとも一緒に楽しんだ。

村でのホーリー祭は、カトマンズのホーリー祭と比べたらとても小規模だった。しかし、子供たちは散々村中を走り回ったあとでも、疲れた姿を一切見せず私たちに勢いよく水、粉を掛けてきて、とても活気のある祭だった。とても楽かったが、ホーリー祭を初めて体験するの私たちにとっては、かなり疲れるものだった。

夜はお祝いということで、ホーリー祭を一緒に楽しんだ村人とご飯を食べたり、ミーランやクリシュナ、パネちゃんが歌うのに合わせて踊ったりした。余談だが、ホーリーの後のお風呂と洗濯はとても大変だった。シャンプーを 4 回しても頭に付いた色水はなかなか落ちなかった。ホーリー祭に参加する際は注意が必要だ。

ホーリーin カトマンズ！

カトマンズのホーリーはとにかく濡れる！汚れる！当日はホテルの敷地内で、その日の宿泊者で色のついた粉を優しく顔に塗っていた。最初は驚いたが、これがホーリーかと思っていた。

しかし本当のホーリーはそんなものではなかった。ホテルから出て観光地の方へ向かっていると、水の入った袋を至近距離で投げられたり、家の窓や屋上からバケツの水をかけられたり…。濡れた後に目に写るのは地元の人のニヤついた顔だった。 ある時は 30 メートルほど離れた道路の反対から投げた水の袋が足にヒット！コントロールは抜群（汗） 観光地に入ると既にカラフルに彩られた人たちの姿がたくさん、そんな人たちからいろんな色の粉を顔中に塗りたくられ、時には口にも入り大変だった。しかしその日はホーリー祭なので、「ハッピーホーリー」の合言葉で大抵の無礼は許される。粉は至る所で売られていたのでその粉を手にした私たちは魔法の合言葉を使い、いろんな人に粉をつけた。ダルバルスクエアという広場に行くとイケてる音楽に乗せて踊ったり、叫んだりとクラブかのごとく騒いでいた。自分もその中の 1 人だったが、そこにはネパール人だけでなく日本人、他のアジアやヨーロ

ッパからも参加しているのがとても驚きであった。 ホーリー祭は国籍関係なく楽しめる祭りであると感じた。
注)祭りから終わった後はしっかり体を洗いましょう。

～カトマンズ調査～

日程：3/20～3/23
メンバー：FIWC 九州 3 人、FIWC 関東 2 人

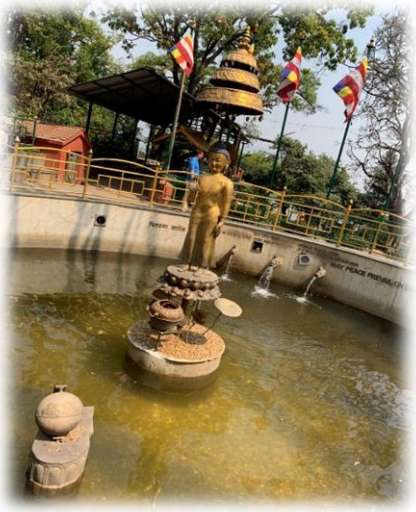
ネパールの首都であるカトマンズで、そこに住む人たちの生活状況などについての調査を行った。この調査の主な目的は、カトマンズと村や日本との比較、またこの調査が何らかの形で今後のネパールキャンプの役に立つように記録に残すことである。

一日目はカトマンズのホーリー祭を体験し、二日目はカトマンズの人たちが日用品や食材を買う店が集まる町であるアソンと、トリチャンドラ大学でインタビューを行った。三日目は午前に日本語学校を訪問し、午後にネパールのスラム街であるスクンブシを調査した。四日目はハンセン病コロニーのあるコカナを訪れた。インタビュー内容は調査を行った場所によって多少変えたが主に、生活・金銭事情・政治などである。

～観光世界遺産～

帰国前日は１日、班に分かれてカトマンズを観光した。そのうち１班はカトマンズの世遺産である仏教寺院、スワヤンブナートとボーダナートへ。

ネパール最古の仏教寺院と呼ばれるスワヤンブナートでは、鮮やかなたくさんの仏教の旗と、観光客に餌をもらう猿に出迎えられた。階段を登れば、遠く未来をみることができるブッダアイが描かれた建物や多くの僧侶の石像、そして死者を天国へ導くとされるロウソクの火があり、圧倒された。スワヤンブナートは小高い位置に立っており、カトマンズ盆地一帯を見渡すことができ、心地よい場所だった。



次に訪れたボーダナートは、観光客向けの飲食店やおみやげ屋に囲まれており、世界遺産としての賑わいを感じた。世界遺産であるコミュニティハウスにも入ることができ、私たちが造っているものとは、大きく異なっていたが、私たちがグマンマニサワラ村で作っているコミュニティハウスの完成形のイメージが少し湧いた。その後、ボーダナートに登り、飾られた花々や、周りでお祈りする人の姿が多く見受けられた。

私たちが知る日本の仏教のあり方と、ネパールのそれとでは大きな違いがあることを、身をもって感じることができた。

13.　他己紹介

大川

我らがリーダー大川。興味深い思想と不思議な魅力の持主。ネパール語ペラペラでキャンパーだけでなく、ネパール人からの人望も厚い。お酒を飲むとテンション・コミュ力・ギャグセンレベルが１０UP↑。キャンプリーダー本当にお疲れ様でした！大川のいいところがとっても反映されていたキャンプで、参加してよかったと心から思ってる(^▽^)/　by 侑貴

愛理

あいりさんはいつも周りのことを気にかけ、みんなをまとめてくれていました。なんでも相談できて頼りになりキャンプに必要不可欠な存在で、一緒にいるととても安心します。また、自分の考えをしっかりと持っていたり、知識が豊富だったりと感心することばかりです。
いつも多忙を極めているあいりさんは、1日のスケジュールを聞くと心配になるくらいです。常に何か考え事をしていますね。(笑) なんでもこなし、様々な分野で活躍する姿はとてもかっこいいです。これからもあいりさんの活躍に期待しています！！！　by　優大

裕也

ワークリーダーを立派に勤め上げてくれた、ネパール三回目、キャンプベテランとなったゆうや。村ではミーランの娘のあやちゃんが大好き♪夏の下見から本キャンに行くまで、周りには見えないところでもたくさんの頑張りをしてくれました。おかげでワークが工期もお金も滞りなく進み、帰国後の裕也はとてもスッキリしてみえたよ～(笑)　by　紗季

陽向

笑顔が素敵な、みんなの天使ひなたさん。キャンパーにモテモテなのはもちろん、ネパール人にまでモテモテ。愛人にならなくてよかった。（笑）毎日、みんなが集まった時に体調管理をするだけでなく、具合が悪い人がいれば飲み物を作ったり、看病をしてくれたりしました。保健係はひなたさんのためにある係と言っても過言ではないと思っています。保健係としてだけでなく、様々な面でみんなをあたたかく見守ってくれて、ほのぼのとした雰囲気を作ってくれました。責任感が強く、みんなを引っ張っていってくれるひなたさん。そんなひなたさんは、このキャンプに欠かせない存在です。

by　優里子

佳澄

正直に言うと第１印象は金髪のイケイケのお姉さんって感じでした。美女で英語ペラペラで頭良くてキラキラしてて高嶺の花的存在でしたが一緒にキャンプに行ってかすみさんのいろんな素顔が見れて、面白かったですよ。かすみさんって可愛いですよ。ピュアなんですよ。キャンプの終わりごろみんなのこと好き！って言いながら泣いちゃった一面もあるんです。可愛いですね。そんなかすみさんが大好きで～す　by　恵理子

真輝

かっこいいんです。オシャレなんです。そう、まさに西南生の鏡。

というのは置いといて、仕事はできるし、頭いいし、すごく頼りになります。後発組とても心配でしたが真輝がいるので安心でした。このキャンプで活かせたことがあれば留学先でもぜひ活かしてください！ネパールキャンパー一同応援しています！！　by　裕也

侑貴

今回のキャンプで一番話した人！こんなにも自分のことを話したのは久しぶりだったし、お互いに普段は話さないようなことを真面目に夜中の3時まで語ったのは忘れられない思い出です。私的にゆうきを一言で表すと「素直」。自分の想いに素直に向き合い、自分はどう思ったのか、何でこう思ったのかをしっかり考えることができる力を持ってると感じました。ゆうき、これから委員長としてFIを引っ張っていくのは、大変なことも多いと思います。だけど、ゆうきの素直さを強みとして活かして、愛されるFIを役員みんなでつくっていってください！応援してます！　by　愛理

蓮

れんは正直後発からだし、馴染めるのかな、大丈夫かなと思っていたけど、そんな心配は一切必要じゃありませんでした。来てすぐに馴染めていたし、「ひなたこれ知っとる？」と言われた言葉は知らないことが多く、音楽で楽しみながら言葉を学んでいた姿を見てすごくいいなって思いました(笑)途中から、れんに聞かれたらなんでも答えられるようにしてやろうと必死で覚えようとしてました。。先発、先々発に比べたら短い期間だったけど、村人からすごく愛されているなと感じました。キャンプを盛り上げてくれてありがとう！　by　陽向

和泉

和泉さんは、おもしろい！！！です。いつも(たまに滑っちゃうこともあるボケで)キャンプの雰囲気を明るくしてくれる、キャンプに欠かせないムードメーカーでした。また、すごく気遣いができるジェントルマンでもあって、困ったときは、いつも爽やかな笑顔で助けてくれました。大学の学部で学んだ知識をワークで発揮する場面も多く、とにかくすごく頼りになる存在です！また、悩みを相談するといつも的確なアドバイスで元気づけてくれるので、悩んだらとりあえず和泉さんに相談するか！というノリで相談してしまう先輩です（笑）　by　真衣

優大

優大は雰囲気も話し方もお腹も柔らかくて、会話しているとグループが自然と笑顔になるような人。すこし抜けている発言をするのでいじられやすいところもあるけど、キャンプの中では、いろんなことに気づけるし自分なりにしっかりとした意見を持っていてそれをちゃんと言葉にできる。1番下の学年で男1人、いろいろとやりづらい場面もあったと思うけど最後までキャンプをやり抜いたのは本当にすごいと思う。
by 和泉

優佳

笑顔がすごくキュートなゆうか。ネパール二回目のゆうかは、新キャンパーにいろいろ教えてくれたり、何事にも熱心でクラファン係として最後までやりこなす姿は責任感強くて頼れる存在でした。ゆうかがいてくれて本当によかった！
一番驚いたのは、ソーイングセットをネパールに持ってきてたこと！破れてた洋服をすぐに直してくれるそんな女子力高めの女の子です！私の中で奥さんにしたい人No.1だね笑　いろいろ助けてくれて引っ張ってくれてありがとう。　by　のだまい

愛和

ラジオ体操やカニ体操(？)を朝からみんなを巻き込んで踊っていた元気の塊、あいわ！
とても人懐っこく、村人、キャンパー問わず誰とでも仲良くなれる姿に感心したり、いつも明るく振る舞い、場を盛り上げてくれるあいわに何度も励まされたりしました。

ぱっとみ、明るくて、能天気そうなあいわ･･･。
だけど、実はそんなことない！誰よりも周りをみているし、キャンプのこと、村人のことなど様々なことを深く考えているしっかり者なんです！！
後輩なのに見習わなきゃと思う部分沢山あったな･･･。今後もFIで活躍するのを楽しみにしてます♡
by　佳澄

真衣

頭のきれる頼れるキャンパー、まいまい。いつも的確な意見を発言し人の意見を聞きだすのがうまい。まいまいなしではミーティングは円滑に進まなかったのではないだろうか…そんなまいまいだが楽しむときは馬鹿になって全力で楽しむ。夜に外で寝袋に入りながら星を眺め幸せについても語り合える。(笑)キャンパーみんなから頼りにされる、そんな子です。
by　真輝

恵理子

心が純粋で、ネパールが大好きなえりこ。和やかな雰囲気をかもしだして、いつも周りの人を落ち着かせてくれる存在。下見のときから、イソックが好きすぎて結構本気で惚れてたんじゃないかと思います。
すごく几帳面で、下見から本キャンまで会計という大事なポジションでキャンプを支えてくれました。えりこはあまり言葉では表さないけど、このネパールキャンプが大好きなことも、キャンプのことをしっかり考えてくれていることも、みんな気づいてるよ。えりこがいないネパキャンはネパキャンじゃないってくらい私たちにとって大きな存在です。一年間、一緒にキャンプに関われてほんとに良かった！自分にとって心から分かり合えた存在です。照　by　優佳

千奈

ちなとは後発組で出発が一緒だったり、カトマンズの観光班が一緒だったりとネパールの素晴らしさを共に楽しんだメンバーの１人です。彼女は普段は大人しめだが、話を掘り出していくと面白い一面もあるチャーミングな人で、村でも visit やプロジェクトを頑張ってる姿は印象的でした。　by　蓮

優里子
知識豊富でどんな話にもついていけます。バンドが好きです。本当によく食べます。なんだかゆりこのなんでも構えてる緩さが心地よく、癒される時もあるけど、なにかとしっかり考えていて、ミーティング後に意見を聞かせてくれた時は、同じ新キャンパーなのに！と驚くことがたくさんありました。一緒にキャンプ行けてよかったです。キャンプお疲れ様でした！！
by　愛和

のだまい

見た目は大人っぽいけど、少し抜けているのだまい。同じ地区に住んでる私でも驚くくらい言葉がなまっている。しかし誰にでも優しくて気配りがすごい。だからキャンプ中はいつも子供に囲まれ、楽しそうに遊んでいたね。村人とも毎回挨拶を交わしていてすぐに仲良くなってたよね。そして、誰よりも日焼けしてたよね。もはやネパール人だね（笑）そんなのだまいがみんな大好きだよ！一緒にネパール行けてよかった！　by　千奈

紗季
表紙やＴシャツなど、デザインの才能が半端ないです！
キャンプでもすごい感受性で、いろんなことに気づいていて、話していて面白いことがたくさんあります。ミーティングの時など、さすが九大生と思えるところも多々あり、尊敬してます！　by　大川

14.　感想

九州大学３年農学部　寺田愛理

　ネパールでの活動に関わる中でときどき疑問に思うことがいくつかある。そのうちの１つは、村の人たちにとって私たちはただの支援者なのか、それとも協力して村を良くしようとする協力者なのか、ということだ。

　キャンプも終わりに近づいた頃、前回の春から親しくしていた村の人に、僕たちは友だちとして助け合いたいというようなことを言ってくれた。その時、はっとした。私は分かっていたつもりで何も分かっていなかったのだ。支援者とか協力者とかそれ以前に、私たちは少なくともそう言ってくれた彼をはじめとした村の人たちと友だちになってたのだ。友だちとして遊んでいたし、友だちとして他愛ない話もした。友だちだから困っているときは助け合いたいと思い協力するのだ。全員が私たちのことを支援者ではなく、友だちとして迎えてくれているかは正直分からない。しかし、友だちとしてお互いのことを思いやって活動できる、ここから生まれる信頼や安心感、これがワークキャンプかもしれない。初キャンプのときは、とにかくワークの合間に村の人たちや子どもたちと関わる時間が何よりも楽しかった。しかし自分に責任が生まれると同時に大切なことを見失っていたように感じる。村での活動には、様々な場面でキャンパーにも責任が生じることを忘れてはいけないが、村の人たちとの活動において大事なのは信頼を築くことだと思う。

　そして、今回はプロジェクトという新しい取り組みが始まった。この活動を通して、村が持つコミュニティに入り込んで活動を行うことに必要な知識と時間の多さを痛感した。特に、私たち自身の想いを伝えたいと思っても、言語の違いから自分たちの声ですべてを伝えることができない状況は、誤解を生む可能性があるという懸念は大きかった。一方で、民族や身分の関係性は私たちの想像以上に根付いたもので私たちの一声で変わるものではないとは理解しつつも、私たちの想いを訴え続けることに対して意味が全くないとは言えないと思うようになった。私は以前まで、すぐに成果が上がらない、一見意味がない活動を避け、他の活動を選んできた。しかし、本当に必要な時は行動しなければならないと改めて考え直すきっかけになった。

　今回のキャンプで学んだ、活動と相手に対して真摯に向き合うこと、面倒で時間がかかるからこそ逃げないこと、は今後どこでどのような活動をするにしても必要だと思う。これから自分がどのような分野で何をして生きていくにしてもこの経験と学びを忘れず活かしていきたい。

福岡大学工学部３年　金丸和泉

自分はネパールという国についてあまり何も知らずにキャンプの参加を決意しました。
カトマンズの空港に着いてからは、人、交通、お店、見ていると日本とは違うことばかりで戸惑いました。

村に着いて車を降りたときに広がる村の様子と壮大な山はとても心に残りました。
村の人たちがまだ自己紹介くらいしかできない、言葉の通じない自分たちを暖かく迎えいてれてくれたことがとても嬉しかったです。初めてのキャンプで村のこともワークのことも他の下見キャンパーと比べわからないことばかりで常に自分の存在意義を作ろうとしていました。ワークは想像とは少し違って周辺整備が主な活動になりましたが、砂を掘るだけでなく砂の中から出てくるいろんな大きさの石を取り除きながらの作業に手こずったことを覚えています。ワークだけでなく、ビジットでも沢山の村人と話すことができてみんな面白い人たちばかりでした。村で行われていた結婚式では子どもたちに囲まれて、踊らされ、追いかけられ、めちゃくちゃ疲れました。踊っているときに見える子どもたちの笑顔と大人たちの冷たい視線は今でも忘れません。 FIWC 関東との繋がりもあって、ワークの手伝いやカトマンズ調査を一緒にこなしていく中でまじめな話からくだけた話まで、いろんな話をして九州とは違った雰囲気や考え方を学ぶことができました。
1 番印象に残っていることは自分が役割を任せられた村でのイベントです。1 回目の運動会は総勢 30 人ほどの子どもたちと一緒に日本の遊びをして、キャンパーそして通訳のパネちゃんの協力で子どもたちみんな笑顔で帰ってくれたと思います。この日は成功でした。
しかし 2 回目の日本食パーティ、村の大人を呼び込もうとしたイベントでしたが当日来たのは 70 人を超える子どもたちでした。予想を大きく超える状況に自分も混乱してしまって場をうまくコントロールできない、振る舞うカレーも足りないと本当に失敗でした。
他のイベント係とも事後ミーティングで落ち込みあいました。この 2 回のイベントは自分の良かったところ、悪かったところをしっかりと反省できる良い機会だったと思います。
最後にネパールで 1 番重要だったのはコーディネーターのパネちゃんの存在でした。最初にあった時から子どものような笑顔で接してくれて、困ったとき落ち込んだときも優しく声をかけてくれて村での生活を共にしていくうちに家族のようなとても親密な関係を築けたし、彼がいたからこそのネパールキャンプであったと強く思います。本当に感謝しています。
今回のキャンプでは嬉しいことやうまくいかないことがたくさんあり、首都と村での生活で自分なりにネパールという国を知ることができました。
ネパールキャンプはこれからの自分をプラスにしてくれる 1 ヶ月だったと思います。

西南学院大学法学部２年　池田千奈

以前から海外ボランティアに興味があり、この大学生活の中で一度はそういう経験をしてみたいと思っていました。普段経験できない生活や文化に触れて現地の人と交流してみたく、またネパールキャンプの報告を聞いて活動の内容やネパールの現地の人の良さに惹かれ今回キャンプに参加しました。

しかし事前ミーティングでは、いざ行動を起こそうとしても、いまいち想像がつかなくて皆の意見や話を聞くばかりで、なにも発言できていませんでした。しかし、前キャンパ

一の人たちが村でのことや、わからないことを教えてくださったので、なんとなく掴めていった気がします。それでもネパールに行く日が近づくにつれ、キャンプが初めてということもあり、楽しみという気持ちよりも不安という気持ちが大きかったです。

そして、いざネパールに行く日が来ました。この日は私にとって全てが驚きでした。ほぼ整備されておらず信号のない道路、日本とは全然違った暮らしを営んでいる村人など、正直私はここで2週間も滞在できるのかと思いました。

そんな中、村に着いて生活を送り始めました。最初は戸惑っていた生活に慣れていく自分にびっくりしました。

いよいよ村でのビジットに行きました。私はそれ以前の問題なのですが性格上、自分から行けるタイプではなく村の人とちゃんと交流できるのか本当に心配でした。しかし、学校にビジットに行った時は子供たちの方から手をふってくれたり、言葉はあまり通じないけど話してくれたりして自分が心配していたのが嘘だったかのようにすぐに仲良くなれたと思います。名前もすぐに覚えてくれて、本当は私から声をかけるべきところを、子供たちの方から声をかけてくれてうれしかったです。他の村の人も見ず知らずの私たちに挨拶をしてくれたり優しく迎えてくれて本当にあったかかったです。その度にこの村の人のためになりたいという気持ちが強くなっていきました。

私がネパールに行ったのが後発であまりワークに関わることは少なかったのですが、プロジェクトをしていく中で村の人たちを知っていきました。自分たちが作ったグンバを村の人たちに使ってもらうために自分たちの思いを伝えたり、村の人たちの思いを聞いたりしました。その中でこの期間だけで全てが解決しない問題を知りこのキャンプの難しさを感じました。それでも自分たちには何ができるのかを考えて、できる限りの行動を起こせたのはよかったと思います。

ネパールで過ごした2週間はとても充実していて新鮮で、決して日本にいてはできない経験ができました。それと同時に、日本で今まで何も感じずに当たり前と思っていたことが、世界では当たり前ではないのだということを深く感じて、ただひたすらぼーっと大学生活を送っている私を情けなくも思いました。学ぶ環境、生活する環境、遊ぶ環境など何不自由ない環境を与えられているのに、その環境をうまく生かしきれていないことに気づかされました。

他にもこのキャンプで学んだたくさんのことをこれからの人生で生かしていきたいと思います。

初めてで何もわからなかった私を支えてくださった他のキャンパーの方々やさまざまな方々のお力添えあってのネパールキャンプだったと思います。本当にありがとうございました。

西南学院大学法学部２年　清水優里子
今回私は後発でネパールキャンプに参加することになり、村に滞在したのは二週間弱でしたが、そこで得たものや感じたことは計り知れないものがあります。
そもそも何故ネパールを選んだのかというと、日本と一番異なる環境の国に行ってみたい、というぼんやりとしたものでした。
出発する前のネパールの率直なイメージは、アジアの最貧国。ネパールで唯一知っていることといえば、高い山が連なっている。ネパールの文化も、言葉も、どんな人がいるかすら分からなかった私には、このイメージしかありませんでした。

日本から中国を経由し飛行機で約 24 時間、ネパールの村へ着きました。そこは日本では考えられないような暮らしをしていて、正直、二週間弱やっていけるかな？と不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、そこに住む村人たちは、何も分からない私をあたたかい笑顔で迎えてくれました。日本では見知らぬ人にこんにちは！とか、元気？とか、言う人は滅多にいないと思いますが、ここの村の人たちはみんな気さくに話しかけてくれる。
そして何より子供達が可愛い！ネパールの子供達は、時には容赦ないこともありますが（笑）疲れたり、村での生活がきついと感じた時、子供達が名前を覚えてくれていて、ゆりこ！と笑顔で抱きついてきてくれた時には疲れもぶっ飛びました。
しかしその中で、私は格差を感じていました。同じくらいの年なのに、ある子は英語がペラペラで、読み書きもできるが、ある子は文字すら満足に読むことができない。都市と村では多少の差があるとは思っていたものの、村の中での格差には衝撃を受けました。やはり貧富の差であるのか、大人の教育に対する考え方の差であるのか。二週間という滞在期間の中でははっきりとした原因はわかりませんでした。短期間での解決は難しい大きな問題であること再実感し、少しでも力になれる活動をしたいと考えるきっかけになりました。

今回わたしはプロジェクト班で、村人にグンバをよりよく使ってほしいという思いを掲げ、調査に向かいました。様々な人の考えを聞く中でわかったことは、全員が多種多様な考えを持っているということ。しかし、それを立場が違う人に言えないと感じている、そもそも言う機会が少ない。そのような状況を目の当たりにして、私たちが作ったグンバをどのように活用してくれるのか。私たちの大まかな思いは伝えることはできましたが、もっと事前に準備しておくべきだったと思います。
村人から聞いた話ですが、ネパール政府が地震の時に、震度の正しい数値を出さない結果、十分な保障額が支払われないと言っていました。日本では考えられないことですが、発展途上国では起こり得ることなのでしょうか。自分の知識の乏しさを口惜しいと思うと共に、世界情勢を知ることの重要性を感じました。

他にもvisitやイベントなど、様々な活動を通して、若者、子供達、お年寄り、ママさんたちなど色々な人たちと関わり、またネパールのイメージは大きく変わりました。一人一人が協力して生きているあたたかい国。そんなネパールにまた戻ってきたいと強く願っています。
何も分からず、積極的に行動ができなかったわたしを支えてくれたキャンパーの先輩方、同級生、気さくに話しかけてくれたネパールの人々、また資金面などで支援をしてくださった皆さんにとても感謝しています。

漫然と生きていた日々の中で、この二週間は間違いなく私の人生で一番濃い二週間になりました。私たちの小さな活動が、いつか大きな力になりますように。日々考えることを続け、小さな行動から起こしていきたいと思います。

九州大学経済学部２年　北川真衣

　ただでさえ“世界トップクラス”の日本の技術が、令和時代にはもっと進歩して、もしかしたら自動運転の技術が確立され、運転席から人間が消えることになるかもしれない。日本中すべてのガソリンスタンドが、水素ステーションへと変わるかもしれない。同じ世界に、同じアジアに、舗装などされていない、岩がむき出しの、雨が降ったら流されてなくなってしまう道路を、真っ黒い排気ガスを出しながらパンパンに人が詰まった車が走っている国があることを、日本にいると忘れそうになる。

　私は去年の夏に下見キャンプで初めてネパールに行った。初めてのネパールでは、自分の想像の中の発展途上国の雰囲気と、実際とのギャップに驚いた。優しく陽気な人々が私たちを温かく迎えてくれて、家族のように接してくれた。先進国だろうと貧困国だろうと、人の温かさは変わらないんだ！と、そう思って感動した。ネパールの中では比較的豊かだが、日本に比べて明らかに生活水準が低く、私たちから見ると「困ることだらけ」な村であるのに、去年の夏の調査で、私たちが「困っていることは何？」ときくと「特に何も困ってない。」と答えた村人はとても多く、この村はこのままでいいのでは、他国からのボランティアや支援によって変わる必要などないのでは、とすら思った。今回の春のキャンプでも村人は変わらず私たちに温かく接してくれた。夏よりもっと仲良くなることができた。しかし、夏よりさらに仲良くなっていくにつれて、夏には見えなかったものが多く見えてきた。村で、ある女の子に出会った。彼女は私と年が近かったうえに英語がすごく上手だったので、会ってすぐに仲良くなった。彼女は現在教師になるために勉強しているそうだ。しばらく他愛もなく話した後、彼女は私に言った。「ほんとは医者になりたかった。だけど私の家庭は階級が低いうえに貧しくて、医学を学べる学校へなんて行けなくて諦めた。」私ははっとした。日本、ネパール、先進国、貧困国、カーストの有無、学びたいことを学べる、学べない…。それまで、日本の同年代の友達と話すのと同じ感覚で話していた彼女の、

私と変わらない笑顔の裏には、先進国でぬくぬくと暮らす私にはない障害が確実にあった。それはきっとほかの村人も変わらない。それまで、笑顔で温かく私たちを迎えてくれて、「困っていることは何もないよ」と笑う村人たちの優しさを、その優しさの後ろに隠した私にない障害を見ようともせずに、「貧しくて生活が苦しい状況で私たちを温かく迎えてくれて感動しました」などと言っていた自分は、所詮先進国から自己満足のためだけにボランティアに来たのも同然だったことに気づいて、情けなくてしょうがなくなった。村人の優しい笑顔の裏にある本当のニーズを満たすために、つまり貧困やカーストといった根本的な問題を解決するために学生である自分にできることはあるのかと自分なりに考えてみてはいるものの、難しくて、まだ何も思いつかない。しかし、先進国に生まれ、ネパールで活動し、村人のニーズに直に触れた人間として、様々なことを学ぶ中で、そして社会に出てからも、常に自分にできることを考えていかなければならない。

村人に集まってもらって話し合いをした際、大人の村人が「自分たちだけでは建設できないと諦めていたコミュニティハウスが、まだ幼い学生が村に来て活動することで、できあがっていくのを見て、自分たちにもできるはずだ、自分たちもこれから頑張ろうと思えた。」と発言してくれた。私はそれがすごく嬉しかった。私は、学生である私たちが村人と一緒にコミュニティハウを建設することが、村人たちにとってどれくらい意味のある事なんだろう、貧困やカーストといった根本的な問題にどうつながっているんだろう、とずっと違和感を持っていた。そんな私にとって、私たちが村で村人と一緒に活動すること自体が、村人の心を少し動かすことがあるという事実が本当に嬉しかった。ワークキャンプが何か、私にはまだわからないけど、そこに少しワークキャンプが見えた気がした。建設中のコミュニティハウスは、冠婚葬祭の行事を執り行ったり、ミーティングをする場所であると同時に、村人が毎日お祈りをする場所になる。すぐに村を不自由のない豊かな村へ変えることはできないが、ゆくゆくはコミュニティハウスが、村の人々の心のよりどころになり、様々な人が集まって話し合い、少しずつ村を豊かにしていく拠点になればいいと思う。私は、大好きな村人たちがいる大好きなこの村のために自分に何ができるか、そしてワークキャンプとは何か、正直今は全く答えが浮かばないが、これからもあきらめず考え続けていきたいと思う。

西南学院大学外国語学部３年　平井侑貴

私にとって今回の春キャンプは、長期間参加できる最後のキャンプだったかもしれない。最後のキャンプがネパールキャンプで本当によかったと思う。ネパールという国が面白かったし、単に楽しかっただけでなくいい意味で苦しんだし、いろんな人と一緒に過ごしていい刺激をもらうことができた。

まずはネパールという国について思ったことを書いていく。ネパールのトリブバン空港に到着して飛行機から降りた瞬間、周り一面山に囲まれていて、空港も今まで見てきた中で一番小さくてあたたかみのある空港で、まさに想像していたネパールという感じだった。

入国手続きをしながら私は「これから日本とは全く違う世界にいけるんだなぁ」とワクワクしていた。大川とパネちゃんが空港まで迎えに来てくれて、タクシーに乗ってホテルまで向かったが、車もバイクもぐちゃぐちゃに走っていていつ事故が起こってもおかしくないように見えて恐かった。タクシーに乗っている間、大川がタクシードライバーとネパール語で話していてびっくりした。この国に慣れている感じがすごくして、こんなに現地に溶け込んでいるっていいなと思った。私たちはその日、ネパールの首都カトマンズに宿泊した。私たちがその日に宿泊したのはタメルという海外からの観光客が多く集まる街で、そこはお土産屋さんがひしめき合っていて、色んな匂いと音が混在している混沌とした場所だった。私はキャンプの後半、首都であるカトマンズ調査を行った。ネパール人が買い物をする街アソンや、大学、日本語学校で街の人たちの生活や、政治に対する意識などを調査した。街の様子、環境、政治や将来に対する考えなど総じて、日本との大きな違いを感じた。また、今回のキャンプはタイミングよくシバ神と HOLI のお祭りと結婚式を経験することができた。HOLI はカラフルな粉をお互いの顔や体につけあうお祭りで、通りすがりの人の顔にべっとりと色付き粉を塗りあう。街を歩いていると、思いもしない場所から水をかけられる。こんなお祭りを国中でやっているネパールは面白いと思う。次に、私たちが活動した村について書いていく。村は自然が壮大で素敵だった。その村は山の斜面にあって石で造られた階段を上り下りして移動する。村人はヤギや牛を飼っていて、ジブリの世界みたいでワクワクした。朝はチャイというお茶を飲んで、食事は基本的にダルバートタルカリ。村の人と同じ食生活して、村の人たちの家に遊びに行って、村の言葉を話す、ネパールキャンプのより村の生活に密着している感じが好きだった。子供たちは、手に負えないくらいに元気でかわいい。ホームステイ先のママは頼りがいのあるかっこいいママだけど、暖かくて優しい。みんながいる間本当に楽しそうで、キャンパーに教えられた日本語（「マジサイコー」等々）をつかってふざけたり、変顔をしたりしているママはお茶目だった。私が序盤から体調を崩して寝込んでいると心配してくれて頭をマッサージしてくれた。村を離れるときママと別れるのが一番つらかった。

そして、楽しいことばかりじゃなくて、苦しいことや難しいことがあったからこそ、考え方を変えたり、自分の改善すべき点が見つかったりした。私は一年生の時からＦＩＷＣで活動してきて、先輩やＯＢ・ＯＧの方々から沢山話を聞いてなんとなく「ワークキャンプってこういうものだろう、、」というイメージがあった。今回、初めて建設プロジェクトのあるワークキャンプに参加してみたが、自分の抱いていたイメージと実際は違っていた。建設プロジェクトのあるネパールキャンプを経験して、私はチャイナキャンプでは感じられなかったワークキャンプのシビアさ感じた。建設プロジェクトがあり、お金が大きくかかわってくるからこそ、村の人達に対して厳しく出なければならないときがあった。権力への懸念もあった。また、ワークにあまり村の人たちが来てくれない共同労働の難しさにも直面した。ワークやプロジェクトに対する考えもキャンパーによってそれぞれで、内容の重たいミーティングが多かった。しかし、だからこそキャンプについて深く考えること

ができた。私は村に長く滞在することが出来なくて、実際に見たり聞いたりしたわけじゃないが、この活動が村に何かしらの変化を及ぼしたことを聞いた。これはあくまでネパールキャンプを通して、私がいきついた考えで、うまく言い表すことができないが、キャンプに来る前私は建設プロジェクトのあるワークキャンプの醍醐味は共同労働だと思っていた。グンバを立てるだけならお金だけ集めて送ればいい。それでも現地にやってくる意味は、グンバ建設という同じ目的に向かって共同労働し、そのなかで絆を深めることによってそのグンバに思い入れを持ってもらい、私たちがいなくなった後でも村人たち自身でグンバを運営してもらえるようになる。そのような共同労働を通した村の人たちの意識や気持ちの変化、絆や思い入れこそが私たちが与えられるもの、村へ来て実際に働く意味だと思っていた。しかし、ネパールの人たちには自分の生活があり、そのリズムを壊してまで、ワークに来てくれと言うのは押し付けじゃないかという考えをほかのキャンパーが私に話してくれた。確かに、ワークキャンプの共同労働というやり方がチャイナやフィリピンには適合したかもしれないが、それがネパールにも当てはまるとは言えないかもしれないと私は思った。私が過去参加したチャイナキャンプは建設プロジェクトというワークがなくても、ワークキャンプを行っていた。なんのためにチャイナキャンプでワークキャンプをしてきたのか、目に見える何かを村の人たちに与えられるわけじゃないし、共同労働できるわけじゃない、しかし村の人たちの気持ちの部分に何かの変化を与えられたではないかと思えた瞬間があった。それこそが私がワークキャンプをそこで行った意味の一つだと思っていた。それが今回のネパールキャンプと重なった。今回のキャンプで、村の人たちは私たちがグンバ建設に従事する姿を見て、学ぶものがあったと言ってくれた。わたしたちが見ていない夜にグンバに水を引いてくれたり、村でミーティングを行ってくれていたり、たくさんの変化があったそうだ。それを聞いて私はとても嬉しかった。ただ、やはり一回行っただけではわからないことが多かった。もっと村で生活してみかった。
一か月もネパールキャンパーと一緒にいると、色んな人の色んないいところや面白いところが見えてくる。特に今回は関東メンバーと一緒にいる時間もながくて、多くの人からたくさんの刺激をもらった。ＦＩメンバーに限らず、ネパールで出会った人たちもしかりだ。自分の甘さを痛感することもあったし、失敗したことも多くあった。だからこそ、身になるものが多いキャンプだった。とても充実していた。このキャンプとみんなに心から感謝している。

西南学院大学国際文化学部２年　古賀優大

　下見キャンプから１年間通してキャンプをしてきて、貴重な経験をすることが出来た。そんな経験をすることが出来た周りの環境にとても感謝している。村の人々、パネちゃん、一緒にキャンプをしたメンバーには感謝することばかりだ。ありがとうございました。

　今回は下見から続いて２回目のキャンプで、ネパールでの生活にも慣れていた。特に先々発でキャンプに参加し、ずいぶんと村に馴染めたのではないかと感じている。村での過酷

な生活にも慣れていて、村滞在１日目から何事もなく生活していて自分でも驚いた。ネパールでの滞在期間は 34 日間。とても居心地がよく快適な生活だった。村での生活が日常化していて、ビジットで村を回っていても下見の時に比べて村人と深く関わることが出来たのではないだろうか。ちょっときついなぁと思っていた時に村人から「悲しそうな顔をしている。」と言われた時は、なるべく顔には出さないようにしていたのにお見通しだった。いろいろな話をしてお互いをよく知ることが出来たと感じたし、村人からいじられるようになった時は、嬉しいような悲しいような気持ちだった。（笑）でもそれだけ深く関わることが出来たからこそだと思っているので、とても嬉しくてビジットを積極的にしてきて村人と関わることの大切さを改めて実感した。

しかし、深く関われば関わるほど村人が直面している問題点や現状が浮き彫りになったように感じられた。下見の時に村人にニーズ調査をした時は「特に困った事はない」などといったことが多く聞かれたり、法律や憲法上は無くなったけどカーストが存在している事を私はあまり感じなかった。それでも今回の本キャンプでは村人の本音が聞けた。正直どうしていいか分からなかったし、あまり触れてはいけない事だと感じた。ワークキャンプをする上で表面的なことだけではなく、村人の本音を聞くことがどれだけ大切か身にしみた。

先々発で参加したのは少しでもネパールに長く滞在して深く関わりたい、やり残すことがないように精一杯活動したいという思いからだった。先々発での参加は自分のとってとても有意義なもので、様々な貴重なことを経験出来た。ワークは下準備から行い資材の発注などしたり、時間に余裕があったので村人にもたくさん呼びかけた。特にレンガ工場へ直接発注に行ったことはとても心に残っていて、村やカトマンズにしか滞在したことがないのでネパールの違った景色を見ることが出来た。また、ワークの最初の段階でレンガを運ぶ作業の際に村人がたくさんワークに来てくれた時があった。この時が１番人が集まり、大盛り上がりだった。先々発は、航空券代は他の出発に比べて高いし、ビザ代は倍以上高い。滞在期間は先発より２週間ほど長く正直辛いことはたくさんあった。でもそれ以上に貴重な経験が出来て得るものは大きかったし、やり切ったと感じている。

突然来た外国人を温かく迎え入れてくれる、ネパールはやはりとてもいい所だ。ネパール滞在中には結婚式など様々な行事に参加することが出来た。結婚式は村の一大行事で、村全体がお祝いムードに包まれる。結婚式には滞在している村と、その隣の村の結婚式に 2 回参加した。隣の村は私たちが滞在している村とは違う民族が住んでいるのだが、結婚式も２つを比べてみると少し違っていてその違いを見つけたり体感するのがとても面白かった。隣の村の人々とはほとんど面識がなかったのにも関わらず、豪華な食事でもてなしてくれた。それに、隣村の人と仲良くなって私たちのワークに参加してもらうことも出来た。他の村の人と交流することはないので、とても貴重な経験だった。

ネパールでの経験は私にとって大切なものだ。今後も定期的にネパールへ行き、村を訪ねて関わっていきたい。そして村が活性化していくのをこの目で見たい。これからもネパールキャンプが続き、長く関わってほしいと願っている。

中村学園大学栄養科学部２年　橋口愛和
私はもともと青年海外協力隊に興味があり、大学生の時に観光地でなく、現地の暮らしが目の当たりにでき、現地民と一緒の生活ができるこのキャンプに惹かれて今回参加しました。そして、ネパールを選んだのはキャンプリーダーから、「俺も、たくさん迷ったけど、アジアの最貧国見てみたいからネパールにした！」とキャンプに対する熱い想いを聞いて自分もそうだ！と思ったからです。
ネパールに行って、数えきれない思い出や学んだことがありますが、1番新鮮なものが私は言語の大切さを目の当たりにしたことです。伝えたいことを伝えられなかったり、村人が一生懸命自分たちに話してくれてるのに分からないことがすごくもどかしかったです。しかし、嬉しいことに拙すぎるネパール語を分かってくれて、お互いなんとなく言いたいことが伝わっていたことがとても驚きでした。それと同時に言語以外にもコミュニケーションツールはあるなと思わされました。
今回私たちは、ネパールでコミュニティハウスの建設に行き、それを村人に管理してもらえるように組織化を中心に色々な聞き取り調査を行いました。その間、私は調査に行く道や、調査した家、自分たちのネパールでの生活が、日本の１世紀前くらいの環境に思えました。トイレが水洗じゃないことや、洗濯機がないことなど、自分たちにとっては不便な点がたくさんありました。しかし、村が１つになってお祝いごとをするくらい関係が深いことや、震災から至る所で、復興作業が取り組まれていて、確実にネパールは前に進んでいると思いました。私は、以前そうであったように自分たちが作ったグンバ（コミュニティハウス）で村人が集まり冠婚葬祭や憩いの場となる日が早くきて欲しいと思います。
私は、この春、今までの自分にはない経験と思い出を持つことができました。しかし、その裏には下見キャンパーが新キャンパーである私たちを支えてくれたり、各リーダー達が密に計画してきた土台があるんだと本当に感じました。
ネパキャンでよかったと心から思います。キャンパーが大好きです。キャンプに行くのを許してくれた家族、支えて一緒に生活したキャンパー、自分たちのやり方を尊重してくれてサポートしてくれたパネちゃん、あたたかく出迎えてくれるネパール人！本当にダンネバード&ラッソー

西南学院大学人間科学部２年　大津恵理子
“海外って怖くない”そう思わせてくれたこのキャンプ。夏と春合わせて一年の約二か月をネパールで過ごした。私にとってネパールという国がこの一年で明らかに特別な国になった。FI に入るまで何とも思わなかった。全然知らなかったし、関わるとも思っていなか

った。でもこのキャンプでネパールの文化、生活、沢山の人々に触れて魅了された。「ナマステ」と挨拶をすればほぼ100%で返してくれる。朝から村のどこかで爆音で音楽が鳴っているし、家に行けば子供たちはノリノリで踊っている。また、ネパールには日本でいうお客様は神様というおもてなしの文化があるらしく、行く先々でお茶やお菓子をこれでもか！と言わんばかりにくれる。お酒と音楽と踊りとおしゃべりが大好きなネパール人。彼らのポジティブすぎる性格にたくさん驚かされた。震災前と比べて生活が変わったことはあるか？と質問すると“今がいい、たくさんの人が支援してくれるから”と答えている人が多くいた。衝撃だった。彼らにとって家が壊れた、道が歩きづらいというのは当たり前のことでただ毎日ご飯を食べて寝れればいいという感じだった。むしろ震災後の方が各国から援助してもらい村の生活が豊かになっているようだった。確かに、村を散策すると病院が建設されていたり、山を昇り降りしやすいように階段をつくっていたり、共同の水場が増えていたり、道路工事が行われていたりと8月には見られなかったものが3月までの約7ヶ月間で着々と進んでいた。こんなにも目に見えて発展しているとわかるなんて本当に驚きだった。そして、今が一番いいと思えるネパール人の国民性。私にはないものを持っていてうらやましく感じた。発展途上国だからかわいそう、アジア最貧国って生活大変そう。ネパールに行く前まで頭のどこかでそう考えていた。でもそんなレッテルなんて薄っぺらすぎた。すぐに張り替えられた。彼らの幸福度の基準は圧倒的に日本人よりも低い。一緒にお茶を飲み、踊り、おしゃべりをする。それだけでキラキラした笑顔があふれる。彼らの幸せな生活とは不自由無く暮らすというよりも一日一日を大切に楽しんで暮らすという方が合っているかもしれない。そんな当たり前の日常は私にとって貴重な経験だった。しかし、彼らの人間関係というものは複雑だった。家族が全員そろって住んでいるという家庭は少なく、父親も母親もいない幼い子供や親が離婚して親戚と暮らしている子供。知らないうちに村のリーダーが変わっていたり、それに逆らいたくても逆らえない環境があったり。私たちが村のリーダーはどんな人がいいかなど村についての調査をしているときパネちゃんが“こんな風に村のきまりとか人間関係とか深入りしないほうがいい。今決まっていることを変えることはしないほうがいい。村のトップの人に私が日本人に指図して変えたと思われるかもしれない。そして村の人も悪く思われるかもしれない。FIWCが本当にこの情報が必要で村がもっと良くなるなら私は通訳します。”と言った。この調査というのは今後の村の組織づくりや引継ぎとして行われた。もちろんキャンパー全員が真剣に、村のためを思って考えたものだ。でも私たちの主観だけで質問を考えて村の人たちの関係性など考えていなかった。パネちゃんの言葉は重かった。胸が痛かった。家族のように接していた村の人たちが少し遠い存在に感じた。私が見ていた彼らの世界は浅いところだったのかもしれない。日本人が関わることで彼らの日常が変わってしまうかもしれない。それはいい部分もあればこんな風に関係性が崩れかけてしまうこともあるということを知った。今回の春のキャンプは夏と比べて村のことネパールのことをより知ることができた。少しずつ変わっていく村の様子、大人びていく子供たち、日本語を覚えてくれて話しかけ

てくれる村の人たち、うれしくもあり発展していくことで変わっていく彼らを見ると少し寂しく感じた。テレビやスマホや電気がなくても毎日が充実してて楽しそうに暮らしている。毎日笑っている。小さなことでも幸せだと感じれる。変わらないでほしい。心からそう思う。
そして頼りない私を受け入れてくれて、困ったときは全力でサポートしてくれて毎日頑張ろうと思わせてくれたキャンパーの皆様方ありがとうございました。たくさんの良き出会いに感謝です。ラッソー。

西南学院大学外国語学部３年　岡部真輝
夏の下見キャンプを経て、2 度目のネパール。1 回ネパールに行っていたから現地の状況もある程度はわかっていたし、村人と連絡も取り合っていたからなんだか少し安心して行けた。しかし、生活することや交流することに対しての不安はあまりなかったもののワークのこと、プロジェクトのこと…このワークキャンプの軸となることに安心はできていない状況だった。最終ミーティングでワークの内容が大幅に変わりそうになったり、プロジェクトの目的を見失ってしまったり、不安な気持ちを全く持っていないキャンパーはいなかったのではないかと思う。しかし、結果から言うとこのワークキャンプはとても満足のいくキャンプだった。最終ミーティングで大きく内容が変わりそうになったワークだが、先先発の仲間たちが現地でのミーティングで尽力してくれ、ワークリーダーをはじめとし計画をしっかりしていっていたこともあり現地ではスムーズにワークを行うことができ当初の予定より余裕をもって終わらせることができた。プロジェクトはたくさん回り道もして当初の計画からは全く変わったプロジェクトになったが、とてもいい経験になった。当初行おうとしていた村人の組織づくりは、村にいつも住んでいるわけでもない日本の学生が口を出すべきことではなくすごく繊細なものだった。大切にしなければならない「学生の私たちにできること」の範囲を超えたものだった。でもそれは、現地に行ってみないとわからなかった。この先どうすればわからなくなった時もあったが、一度頭を整理しミーティングをしたら新しい方法がいくつか出てきた。私はプロジェクトのミーティングをしているときに「人と話し合うこと」の大切さを実感した。たくさんの人がいる場でのミーティングはなんだか発言するのが怖くて受け身で参加してしまいがちだったが、一人が一つ意見を言うだけでその人数分違った意見が出て、そのいくつかの中でいい点を選び抜いてたくさんの意見を組み合わせて一つの方法を見つけ出せた。一人で考えていても出ないような意見がたくさん出てきて、一人で考えていたら見つけられないような落とし穴を発見できて、一人一人が自分のこととして考えてミーティングを行うからすごく実りのある話し合いができた。このような経験を学生のうちにすることができたのは私にとって財産となった。プロジェクトは今年初めての取り組みでわからないことだらけで、スムーズにはいかなかったが得られたものはたくさんあったと思う。今まで知らなかった村の情報、新

しいことを始めることの難しさ、組織を作るということ、様々なことを学べたから私はプロジェクトに携わることができてよかったと思った。下見で村に行った時よりずっと村が大好きになって最後村を出る時にすごく寂しくなった。改めて暖かく私たちを迎え入れてくれたグマンマニサワラ村のみんな、一緒に頑張ったキャンパーのみんなに感謝をこの場を借りて伝えたいと思う。ありがとう。

西南学院大学外国語学部２年　田原優佳

下見キャンプからネパールキャンプに参加して、長かったようであっという間でした。最初はただ自分の経験、成長のために挑戦しようと決めたワークキャンプ。二度キャンプを経験してやっと、ワークキャンプがこんなにも奥が深いことに気付きました。そして、キャンプにハマっている自分もいました。ボランティアは自己満足だ。そう思っている人も多いと思います。今までは、周りにそう思われていても、正直何も言い返せない、自己満足でしかないのかなと、この活動にはっきりとした意味を見出せませんでした。でも今回の本キャンプで、ただ支援するだけの活動のボランティアとは完全に違うワークキャンプの良さに気付き、自分の肌で実感できたことは本当に得るものが大きかったなと感じます。キャンプ中、ママをはじめとする村人が自分たちに素をみせてくれ、本気で笑い合える、前回のキャンプでは感じることができなかった、その瞬間は本当に心地よかったです。同じ村でキャンプを重ねると、前回のキャンプよりこんなにも違ってみえるのか、と正直驚きました。結論から言えば、今回のキャンプで果たせたワークの面や、村人一個人に与えれた影響からみると、すごく意味のあるキャンプだったと思います。傍からみればちっぽけな影響かもしれませんが私たちにとってはすごく意味があります。

　また、たくさん感じ得ることが多かった今回のキャンプで、難しいなあと感じたことも何度もありました。プロジェクトで何人かの村人を巻き込んでのミーティングをしているとき、ある女性に、ふと何気なくした質問の中に身分に絡んだものがありました。ミーティングのあと、英語が話せて前回のキャンプから仲良くなったRajani という女性にこう言われました。「彼女は村の中ではカーストが低いほう。あまりカーストに絡んだお話はできない。なぜならカーストの話をすると彼女は怒っちゃうから。自分の低い身分を気にしているから。」と。隣の家には違う民族が住んでいる、というこの村には実は自分たちにはまだまだ見えない問題があって、そのような問題にどこまで踏み込んでいいのか。正直自分には分かりません。自分たちにできることがあるのか、それも今は全く分かりません。村で生活するのは二回目、前回のキャンプから毎日のように会いに行き、お話をして、バイバイする、を繰り返して。やっと、自分の家族の深い話や表面上の関わりだけでは決して見えない村の問題を私に語ってくれるようになったという段階です。

　同じ村でキャンプを続けること、もちろん関わりが深くなって見えてくる良い面もありますが、それと同時に表面上の関わりだけでは簡単には見えない、解決し難いような問題も見えてくるんだなと感じました。

もちろん、キャンプ観は人によって異なるし、誰か別の人のキャンプ観を人に押しつけるのも違うと思います。自分のキャンプ観を堂々と語るのは好きじゃないけど、ネパールキャンプは、自分たちが思い考えることを、自由に柔軟に挑戦できて、”ワークキャンプ”の意味を自分なりに考えて考えて、キャンプでは実際に自分の目と肌で感じ得られるキャンプだと私は思います。語彙力ないけど。

このキャンプで挑戦した全てのことが成功した訳ではないし、上手くいかないことも多くあったけど、皆で頭フル回転させてキャパオーバーになりながらも、なんとかキャンプを前向きに方向転換させ、それぞれ個人がやるべきことを自分なりに感じ取り全力でこなしたことも、全て無駄になることはないと思います。

正直、自分の中でワークキャンプの意味というものを決めつけるには自分はまだ、不完全な経験値で、だからこそ違う国のワークキャンプも経験してみたくて。もっと経験して、最終的にはまたこのネパールキャンプに戻ってきたいなと。ネパールキャンプはそんなキャンプです。

九州大学工学部４年　岡田紗季

私は今回のキャンプが三回目のネパールでした。三回も行くと、周りからはてっきりネパールが大好きだと思われがちです。しかし、私はネパールが特別好きなわけではありません。それでも行くことにした理由と、これまでボランティア活動に参加してきた、今の気持ちを書きます。

私はある時友達に

「私、ボランティア好きじゃない。」といわれました。私がボランティアしてるの知ってるのに、ボランティアしたことない友達に言われました。

へえ。って受け流せばいいのに、私は受け流せなかった。

ずっと憧れてた海外、国際協力、一年間関わってきたネパール、ワークリーダー。

好きとか嫌いとかそんな基準で発言しちゃいけないし、個人的な感情より周りを見て動くとかプロジェクトが効率よく安全に進むとかお金にミスがないことの方が大事だと言い聞かせるうちに、価値とは何の関係もない基準にいつのまにか囚われてました。

好きじゃないものを頭で好きに分類しようとするのはきついです。

きっと義務や責任だけで動くと、周りや環境を否定的に感じてきます。そういった考えても仕方のないことを考えるよりも、どうしたら自分の気持ちが下がらずにいられるのか考えたいと思いました。

何が好きで何が嫌いか。何をしている時は楽しくて何をするのはきついのか。どんな頑張り方はできるのか。

考えているうちに、人には向き不向きがあって、人とは違うから自分で見つけるしかないといたって当たり前なことに気づきました。そう思ってから、私はなるべく頭を使うより、自分の感覚を信じようと思っています。

ただ、その時に周りの意見を前向きに受け入れる柔軟性を常に持っていたいです。
余談になりますが、私は丹誠込めてつくられた芸術的なものが好きです。アートや音楽、本、映画、そして街。こだわりや個性が表現されているものに心がわくわくします。誰かの思いや経験が人を引きつける理由だと思います。いつか魅せるものをつくれる大人になれたら素敵だなと思っています。
好きなものが分かった今、ネパールで好きを見つけに行きたいと思い、キャンプに行きました。やっぱり私はマサラ等の香辛料の味は好きにはなれませんでした。20 分で行くと言っておきながら車が故障したりタイヤがパンクしたりして 2 時間かかったときは日本が恋しくなりました。でも、毎日誰かと一緒に食べるご飯は味以上においしく感じるし、パンクしても一人じゃないから勝手に笑ってました。そして何よりネパール人が私の些細な言動を覚えていてくれたことがとてもうれしかったです。
結局私は人が好きです。一人は嫌いです。何にもなくていいから、誰かに会いたくなった時また行きます。
最後に、ネパールの後輩たちへ。みんな本当にいい子でした。私を混ぜてくれてありがとう。今回ネパールで感じたことを、誰かに共感してもらえなくても、ほとんどの人が知らなくても、自分の心に残った瞬間を大切に覚えていてほしいです。多くの人にとっては価値のないことでも、誰かひとりにとってはかけがえのないものになったりします。

西南学院大学国際文化学部２年　野田麻衣
今回初めて参加したキャンプがネパールでした。もともと海外には興味あったけど、実際ネパールのことは何も知らなかったし、国内ミーティングでもネパールに行くという実感がわきませんでした。初めてだから、どういう風に村人とコミュニケーションをとったらいいかわからなくて不安を持ちながら日本を出発しました。
村に着くと、子供たちがすぐに近寄ってくれてあたたかく迎えてくれました。子供たちは、すぐに名前をおぼえてくれて、道を歩いていると「のだまい！」と名前を呼んでくれたり、大人の人も「ご飯食べた？」と話しかけてくれたりとても嬉しかったです。普段外を歩いていて、挨拶は知っている人にだけしか日本ではしないけど、誰かに会うたびに「ナマステ」と言ったり、話しかけてくれたり村だからこそできることだなあと思いました。元々子供はそんなに得意ではなかったけど、笑顔で名前を呼んでくれたり一緒に遊んでいくうちに、子供たちってこんなに可愛いだと初めて気づきました。村で生活していく中で、どんどん不安もなくなり、明日は村の上のほうに VISIT 行きたいとか、あの子に会いたいとか毎日の生活が楽しく感じるようになりました。
ワークでは、ミステリとスキルワーカーと村の男の子と一緒にセメントを運んだのが一番の思い出です。みんなで、「ワッショイ！」を言いながらパスしていくとき団結力を感じたし、何よりみんなが笑顔で運んでいて楽しかったです。

プロジェクトでは、国内ミーティングで何度も話し合ったけれど実際村に行って思うように進まなくて悩む部分が多くありました。そのたびに、ミーティングを行い話し合っていきました。私は、意見をはっきりと言える性格でもないし、心のどこかで誰かを頼ってしまう自分が情けなく思うこともありました。しかし、普通に日本で坦々と春休みを過ごしていたならば絶対考えないことも、ネパールキャンプに来たことでさまざまなことを考える機会がたくさんあり、これはわたしにとってとてもプラスになったと思います。
ほかにも、シバ神の誕生祭を目にしたり、ネパールの結婚式に参加したり、ホーリー祭を楽しんだり貴重な経験ばかりでした。言葉が通じなくても村人と楽しく交流できることや、行列を作ってお祈りをしに行く人々を見て、宗教がネパール人にとってどれだけ大切なものであるかなど気づかされることが多くあり、新しい発見ばかりでした。こういったことは、日本にいたら知らないままだったし、ネパールの人々もだし一緒にネパールにいったキャンパーと一緒に過ごして、今の自分を見つめなおすこともできました。このキャンプに参加できたことを本当に嬉しく思います。ありがとうございました。

西南学院大学人間科学部３年　友松陽向
　約半年ぶりに行った村は変化していた。セメントで綺麗に塗られた新しい家が多く建てられていたり、道路工事が行われていたりと村の復興が進んでいることが目に見えてわかった。久しぶりに会った村人は変わらず元気で、私たちを歓迎してくれた。
大人との関係があまり築けなかったという前回の反省もあり、私は積極的に大人とコミュニケーションを取ることを心がけた。そこで、私はグンバの横で作業をしている村人たちの休憩に混ざって言葉を教えてもらったり、一緒に石を運んだりして彼らとも多くコミュニケーションを取るようにした。彼らもまた私たちと積極的に関わろうとしてくれ、自らレンガ運びを手伝ってくれるようになった。
そのため、私は勝手に、彼らがワークやプロジェクトに来てくれるものだと思っていた。しかしワークに村人はほとんど来なかった。
ワークを通して、グンバを自分たちのこととして考えてもらいたいと思っていた私は、村人と一緒にワークをすることがベストだと考えていた。
自分たちの思いも伝えたいし、村人の思いも聴きたいと考えていた。しかし、いざプロジェクトを始めようとしたとき、声かけしていたにも関わらず大人が集まらなかった。
それは、ちょうどその時にグンバの隣の家のセメント流しが行われ、それに村人らが集められていたからであるが、何故その日に行わなければならなかったのかという裏切られた気持ちになってしまった。加えて２日、３日くらい前から資材が盗られたのではないかという話も上がったこともあり、私はネパールに来た意味がわからなくなってしまっていた。今の状態では資材をもってきた支援者にすぎないし、村人らもただ日本人が来てグンバ建てている程度にしか考えていないのではと思っていた。

今思えば、私は村のこともネパールの文化もきちんと理解していないまま自分の尺度だけで物事を考えてしまっていた。
この出来事がきっかけとなり、プロジェクトを行う意味、目的をもう一度全員で話し合った。そして残りの少ない時間で、次の下見にこの村の情報を残すための調査と自分たちの思いをまとめた文章を同時に伝えた。調査をしている中で、民族の違いやそれぞれの宗教毎でのグンバの使い方などがわかり、私はこの村について全く知らなかったと思った。村人とのミーティングや調査の際、よく村人は、日本の学生の働きを見て自分たちも頑張ろうと思うと言ってくれた。それは、自分たちが来た意味が感じられた瞬間だった。その後も自分たちが知らないところで、夜、ワークに必要な水を取りに行ってくれた村人がいたり、村人らでグンバに関するミーティングを行ってくれていたり、またグンバ建設の村の中心メンバーが民族関係なく呼びかけを行ってくれていたということを知り、村人たちが自分たちのこととしてグンバのことを考えてくれているようでとても嬉しかった。あらゆる国から支援を受けていてこの村としては支援には慣れているはずだ。そんな村人が学生から学び、自ら村人が動くようになった。一つのプロジェクトをきっかけに村人たちの意識を変えられるのは、共に時間を共有し関係を築いた私たち学生にしかできないのではないかと考えた。村人の意識を変える、そういう意味では村にグンバを建てたことよりも良い影響を与えられたのではないか。最後に村を出る際、様々な民族の方々がいただけでなく、泣いていた村人も多く見た。きつかったこともあったが、この村から多くのことを学び、私たちは村の一員のように可愛がってもらった。またこの村に帰りたい、まだまだ知りたいと思うほどいい村で、温かい人たちが多く大好きな所である。
最後に…
今回の春のキャンプがこのメンバーで本当に良かったです。一人でもかけていたらこんなにも充実したキャンプは送れていなかったと思っています。一人一人からたくさんのことを学べました！ありがとう、お疲れ様でした(^〇^)

西南学院大学人間科学部３年　洲崎裕也
私もチャイナキャンプ、ネパールキャンプを経験して今回で 5 回目になるがもっともきつく、今までで一番考えさせられるキャンプとなった。今回初めてワークリーダーという役職を務めたが、ワークを順調に進めるだけでなくネパールキャンプを何の問題もなく遂行することも頭に入れながらキャンプをしなければならないため相当きつかった。
ワークに関しては計画していたワークを無事完成することができ、予定していなかった追加ワークも進めることが出来たためワークに関しては成功と言える。しかしこの成功に至るまでにはうまくいかないこともあった。例えば、出国１週間前にコミュニティハウスを管理している代表が交代してしまい、我々の計画していたワーク内容と代表が進めようとするワーク内容が異なっており、急きょワーク内容をどちらで進めていくかＭＴＧを行っ

た。結果的に代表とＭＴＧを行い我々の計画していたワーク内容で行うことになったが、一時は今回のワークはダメになるんじゃないかと思った。

ネパールにいるときは今後のネパキャンがワークキャンプの将来像を考えさせられた。バルビシから村に行く際、下見の時より道が舗装されており重機を使っての整備が行われていた。4 年が経った今、ようやく村周辺も政府からの支援が行き届き、各世帯の居住もプレハブ住宅からレンガ住宅に移行しておりどこの世帯も建設ラッシュであった。1 年前までは柱しかできていなかった唯一の病院も現在はプラスター作業を着工しており、復興支援が進んでいるのだとこの身で実感することができた。下見の needs 調査において村人たちが必要としていたものが道路舗装、病院建設、コミュニティハウスの建設であったが、ようやく村人たちの needs が実行されつつある。そしてそれら公共施設のコミュニティも形成され、ネパールキャンプは復興支援という形ではなくなってきていると感じた。つまり立ち直りつつある村がこれからどうやって生活水準を上げていくかを考えていかなければならない。
コミュニティハウスのワークにおいて村人たちが協力することが難しい部分もあった。例えば彼らも仕事をしなければならないし、来てくれても専門的な仕事で村人らが手伝えるようなワークがなかったこともあった。
しかし村人たちの協力がわずかであったとしても、我々と村人でコミュニティハウスを建設しているということに変わりなく、これが村人たちの成功体験になってくれればいいと願う。
日本の学生と建物を建てたという事実が彼らの自信となり村の「活力」となってほしい。

今回のキャンプがほかのキャンパーにとって有意義なものになったのであればよかったし、また行きたいと思ってくれる人がいることを期待している。大川には強く言い過ぎたし、価値観が違うから、大川に対して思うこともたくさんあったけど、大川ほどネパールを熟知しているキャンパーはいなかったし、17 人もいるキャンパーをまとめ上げたのはさすが大川峻右だと思った。
愛理にはプロジェクトという新たな取り組みのリーダーお疲れさまでした。去年の春から大川と愛理は行くことが決まっていて、しかも他の団体との兼ね合いもあって暇そうにしている愛理を見たことがありません。他団体との両立、そしてキャンプ中も色々なことがありましたが、無事キャンプを終えることが出来て目標は達成できたのではないでしょうか？
プロジェクトお疲れさまでした。

まさか2年で行くとは思ってなかったネパールキャンプ。きついことばかりで悩むことも多かったけど、その分キャンプについて考えることも多かったし今キャンプが一番自分のためになったと思えるキャンプになった。
きついことばかりだったけどネパールキャンプに参加できてよかった。

西南学院大学外国語学部３年　砥綿佳澄
自分はそこまでグマンマニスワラに愛着がある方ではないと思っていたが、村に着いた瞬間、懐かしさと安心感と心の底からのまたこの村にきて良かったという思いが押し寄せてきて、しかも涙がでそうになり、自分でも驚いた。久しぶりに会った村人達は自分の名前と顔を覚えてくれていて、とても嬉しかった。今回の本キャンプは前回の本キャンプの反省を生かして、事前準備や先々発組がワークを早く進めるということをしていたため、後発である私が村に着いたころには今回のワークの予定のほとんどを終えている状態であった。ワークをする日も、あまりすることなくて手持ち無沙汰だなと思っていたのだが、指示を待つのではなく、自分から考えて積極的にできることをすればよかったなと反省している。ワークは予定より格段にはやく進み、順調であったが、反対にプロジェクトの方があまり上手くいっていなかった。下見のときから、村人と一緒にワークをすることを目標にしてビジットに力をいれていたのだが、スキルワーカーが進める作業が多い、同時進行で村人達が他の建物を建設しているから忙しいというようなことが原因で思うように村人を集めることができなかった。今までは村人のところに毎日ビジットをすることで仲良くなれば村人はきてくれるだろうと思っていたが、現実はそんなに甘くなくてシビアだなと痛感した。プロジェクトの方向性がぐちゃぐちゃになり、何を目的にしているのか分からなくなったり、キャンパー全員が同じゴールに向かってプロジェクトをしているのかといった問題がキャンプ中に起こったりした。プロジェクトについて何度も長い時間話し合いが行われた。自分はワーク班であったため、行く前までにプロジェクトのことを深く知ろうとしたり、考えてみたりすることはほとんどなかった。そのため、キャンプ中にプロジェクトに対する自分の軸がしっかり定まっていなかったのだなと思う。今回のキャンプでの話し合いの結果、村人にグンバに関心をもってもらい、他人事ではなく自分事として捉えてもらうこと、グンバを管理する組織を作ることがこれからの取り組むべきことであるということになった。私たちの１番の目標は村のどの年齢層、民族、カーストにもグンバを使ってもらい、村を活性化させるような話し合いをグンバでしてもらうということである。今回だけでは結果を出すことは不可能ではあるが、根気強く、長期的に行うことで確実に少しずつ効果ができるようなことを行う必要があるという結論に最終的にまとまった。
たった数日ではあるが、次のネパールキャンプのプロジェクトに繋げられるような情報を少しは集めることができたと思う。しかし、パネちゃんという今回私たちのキャンプのコ

ーディネーターがあなたたちは何十年もこの村に関わるわけではないのだから、ここまで介入してこないでといったようなニュアンスのことを言っていたという話しを耳にした。それをきいたとき、私たちがしていることはただの自己満の押し付けで無責任なことなのかなと感じた。今も自分の中で、挑戦するべきであるという思いと自分らのエゴでしかないだからそこまで介入するべきではないのかなという気持ちで葛藤していて、答えはでていない。それはこれから、ゆっくり考えて、自分の中で整理して、消化して答えを見つけようと思う。

　今回のキャンプはミーティングが何時間も行われたり、話し合う内容が重かったりして楽しいばかりではなかったが、考えされられることは沢山あったし、自分でも気づけなかった自分の特徴や新たな考え方を発見することができた。また、下見よりもネパールキャンプに対する熱意と、村やキャンパーに対する愛情が芽生えたので行って本当によかったと思う。下見キャンプを含め、今回のキャンプでの経験や考えたことを忘れずに、これからの人生の糧にしようと思う。

西南学院大学経済学部３年　大川俊右

自分はよく現地人と言われます。

よく日焼けをするので色黒であることや、人を呼ぶ際に、ネパール人のように

「おー〇〇（名前）」と叫ぶことがそう呼ばれているのだと思います。

今までそう言われてきましたが、自分自身現地人化することに特に意味は感じていませんでした。自分の中でもネタの一つと捉えていました。

しかし今回、3 回目にして初めて現地人化することの意味に気づきました。

日本人としての考えは忘れずに行動しましたが、日々の感覚は現地の人たちにできるだけ近くなるように考えていました。そこで感じた変化がいくつかあります。

村が地元のような感覚がしてきて、そこでできた友達が、日本にいる友達のような、ネパール人という枠を感じず、本当の友達と思える人ができました。村には行きつけのお店もできて、2 日に 1 回はそこにご飯を食べに行きました。お店の人も常連さんのように接してくれて、自分が来たらいつも頼んでいる料理を出してくれるようにまでなりました。

他にも、村の友達と遊びや、ご飯にでかける機会を多く作れるようになりました。

以前、村の人たちはいつも暇そうで日々何をしているのだろうか、と疑問に思ったこともあったので、その日々に自分を組み込むことができたようで、うれしく思いました。

また、その友達と話していく中で、今まででは聞けなかったような話をたくさん聞くことができるようになりました。家族のこと、自分の過去のこと、将来やりたいことや、他の村人のことなど、多くの話を聞けました。その中でも特に聞けて良かったと思う話があります。

それは、自分たち日本人がこの村に来て、活動をして、村の人たちの考えがどう変わったかという話です。これまで、全体で行うミーティングではよく、まだまだ子どもの日本人

たちが、頑張っている姿を見て自分たちも頑張るべきだと思ったと言ってくれていましたが、本当のところどう考えているのか、疑問でした。しかし今回、仲のよい村の人と、１対１や、１対２で話すことができた際、本当に日本人の姿を見て変わったということを何度も言われました。具体的に、新しくビジネスを始めようと動き出した人がいたり、村で行われるプロジェクトを積極的に運営しようとしている姿を見たり、と言っていたことが本当なのだと、感じることができました。さらに、今他に生活で困っていることがないか、日本人に協力してほしいことがあるか、と尋ねた際、自分たちでやれる、と言われました。今まで、村に来た際、同じ質問をすると、水に困っている、や道路を作ってほしいなどと言われてきましたが、そういわれたのは初めてでした。実際今回村に行くと、新しく作られた水タンクがいくつかありました。自分たちの活動は、将来的に村の人たちが、自分たちで動いて村をよくしてほしい、というのが目標であったのでそれを聞いた際はすごくうれしい気持ちになりました。自分は今回、現地人化することで、今まで聞けなかった話を聞けました。また、村の人たちから、オオカワは現地人だ、とか、優しくて信頼しているとか言われる機会が多く、村の人たちと、心の距離も縮まることができたのだと感じることができました。自分は、この現地人化がこの活動の一つの答えだと感じています。村のみんなに出会えることができて、多くの学びも得ることができ、この活動を行ってよかったと心から思います。

西南学院大学経済学部３年　小川蓮

まず、僕は今回初めてネパールキャンプへ参加し、ネパールの人々、町、すべてが好きな国になりました。僕自身、後発で現地へ馴染めるのか、キャンパーと仲良くできるか、などの不安は正直一切なかったです。それは、人見知りをしない性格とノリと勢いで大学生活を過ごして来た自信からだと思います。ネパール語も何も覚えずなんとかなるという精神で現地へ乗り込みました。案の定、すぐに現地の人ともキャンパーとも仲良くなり充実したキャンプを過ごすことができました。

特に今回のキャンプはリーダーの大川くんとよく共に過ごしてました。現地人化していた彼の背中を見て必死にネパール語を覚え、ノリと勢いで現地の人々とも仲良くなり、2週間だけども覚えたネパール語はキャンパーの中でも多く知っている方だと自負しています。

キャンプの一番の思い出を上げるとしても選びきれないです。それぐらい楽しかったです。

１つ忘れられない思い出は、イベントで道着を着て子供たちと空手をしたことです。
僕は大学で空手道に励んでいます。ネパールでは空手は人気のスポーツの１つで子供たちに大人気です。空手も好きで、子供も好きな僕からしたら教えて一緒に楽しんでいる時が一番幸せな時間でした。

携帯をまったく使うことができない２週間。これは人生で初めての経験でした。言葉を調べようと思っても調べることができず、道を調べようと思っても調べることができない。

そんな時だからこそお互い協力しあい、キャンパーどうし村人どうし仲良くなれるのだと実感できました。非日常体験とはまさにこのことだと思いました。

他にもあります。お風呂です。まさかの毎日、川から引っ張ってきた冷たい水でお風呂に入る。こんなこと日本じゃまずしない。そこがまた面白くて一人で水遊びしてるかのようにたのしみました。お風呂関連で言うともう一つあります。一度だけ、キャンパー何人かで「タトパニ」という地域まで調査に行く機会がありました。そこには、ネパールで唯一の天然の温泉があります。調査が早めに終わったので、こっそり温泉に入ってきました。もうこれ以上にないぐらい感動し、人生で忘れられない思い出になりました。

最後に、僕自身が今回のネパールでのワークキャンプを通して学んだことについてです。僕自身、ボランティア活動の経験がこれまでになかったので、そもそもボランティア活動とは何だろう？ということから始まりました。調べてみると、ボランティア活動とは自発的に他人・社会に奉仕する人または活動。確かにそうだと思いました。きっかけは誰しもそうだと思います。しかし、今回の活動を通して、ボランティアする側、される側が共に同じ目標に対して考え動く「共同」がボランティアだと僕は思いました。グンバ建設を通して村人に思い出を作ってほしいから始まった今回のキャンプ。グンバが立派に形になるにつれて村人のグンバに対しておもいは、「思い」から必ず建設したいという強い意志の「念い」に変化し始めたのではないかと感じました。この感情的な面が今回のキャンプの一番の収穫なのではないかと僕は思いました。

今後のグンバの発展、村人の発展が楽しみになりました。ネパールへ行くことを決めて本当に良かったです。

FIWC

Kyushu

大川俊右 西南学院大学 3 年

洲崎裕也 西南学院大学 3 年

寺田愛理 九州大学 3 年

友松陽向 西南学院大学 3 年

砥綿佳澄 西南学院大学 3 年

岡部真輝 西南学院大学 3 年

平井侑貴 西南学院大学 3 年

小川蓮 西南学院大学 3 年

金丸和泉 福岡大学 3 年

岡田紗季 九州大学 4 年

古賀優大 西南学院大学 2 年

田原優佳 西南学院大学 2 年

大津恵理子 西南学院大学 2 年

北川真衣 九州大学 2 年

野田麻衣 西南学院大学 2 年

橋口愛和 中村学園大学 2 年

池田千奈 西南学院大学 2 年

清水優里子 西南学院大学 2 年

轟木亮太 九州大学 4 年（国内係）